

三枚續

泉鏡花作

表紙へうしの書ゑの撫子なでしこに取添とりそ  
へたる清書草紙きよがきさうし、未まだ手て  
習ならひ兒この作さくなりとて拙つたなき  
をすて給たまはず此このぬしと  
ある處ところに、御名おんなを記しるさせ  
たまへとこそ。

明治三十五年壬寅正月

鏡花

\*\*\*\*\*

「何うも相済みません、昨日もおいで下さいましたさうで毎度恐入ります。」

と慇懃にいひながら、ばりかんを持つて椅子なる客の後へ廻つたのは、日本橋人形町通の、茂つた葉柳の下に、おかめ煎餅と見事な看板を出した小さな角店を曲つて、突當の煉瓦の私立學校と背合せになつて居る紋床の親方、名を紋三郎といつて大の怠惰者、若い女房があり、嬰兒も出來たし、母親もあるのに、東西南北、其の日其の日、風の吹く方**に**ぶら／＼と遊びに出で、思ひ出すまでは家に歸らず、大切な客を斷るのに母親は愚癡に成り、女房は泣聲になる始末。

又かい、と苦笑をして、客の方が却つて氣の毒になる位、別段腹も立てなければ愛想も盡かさず、唯前町の呉服屋の若旦那が、婚禮といふので、いでや豫ての男振、玉も洗つてます／＼麗かに、雫の垂る處で一番綿帽子と向合はうといふ註文で、三日前からの申込を心得て置きながら、其の間際に人の悪い

紋床、畜生めか、何かで新道へ引外したゝめに、た  
うとう髭だらけで杯をしたとあつて、戀の敵の  
やうに今も憤つて居る其ばかり。町内の若い者、  
頭分、藝妓家待合、料理屋の亭主連、伊勢屋の隠居  
が法然頭に至るまで、此床の持分となると傍へは行  
かない。目下文明の世の中にも、特に其の姿見に於  
て、其の香水に於て、椅子に於て、ばりかんに於て、  
尤も文明の代表者たる床屋の中に、此の床ツ附ばか  
りは其の汚さといつたらないから、振の客は一人も  
入らぬのであるが、昨日は一日仕事をしたから、御  
覧なさい此の界限に一寸氣の利いた野郎達は残らず  
綺麗になりましたぜ、お庇様を持ちまして、女の子  
は撫切だと、呵々と笑ふ大氣焰。

尤も小僧の時から庄司が店で叩込んで、腕は利く、  
手は早し、其で仕事は丁寧なり、殊に剃刀は稀代の  
名人、撫でるやうにそつと當つて然も布を裂くやう  
な刃鳴がする、と譽め稱へて、いづれも紋床々々と  
わがまゝ承知で鬚貞にする親方、渾名を稻荷といふが、  
これ化かすといふ意味ではない、油揚にも關係しな  
い、藝妓が拝むといふでもないが、つい近所の明治

座最寄に、同一名の紋三郎といふお稻荷様があるからである。

「お前何處かで又酒かい。」

と客は笑ひながら、

「珍しくは無いが能く怠惰けるなあ。」

「何、今度ばかりや仲間の寄でさ、少々其の苦情

事なんですて、

「喧嘩か。」

「否、組合の外に新床が出来たんで、何うの彼うのつて、何でも可いぢやあがせんか、お客様は御勝手な處へ入らつしやるんだ。一軒殖えりや其奴が食つて行くだけ、皆が一杯づゝお飯の食分が減るやうに周章てやあがつて、時々なんです、いさくさは絶えやせん。」

「それぢやあ口でも利かされたのかね。」

「ならば大名の方なんですさ。」

「其に何さ二日かゝることはないぢやないか。」

「すつかり御存じだ。」と莞爾する。

「だつておい四度素歸よたびすがへりをしたぜ、串戯じせうだてぢやあない。  
ほんたうに中洲なかすからお運び遊あそばすんぢやあ、間あひだに橋はし  
一個ひとつ、お大抵たいていではございませんよ。」

「おや、母親おふくろがいつた通り。」

「貴客あなた、全まつたく然さう申まをすんでございますよ。」と

長火鉢ながひばちの端はしが見みえて、母親おふくろの聲こゑがする。

「はゝゝはゝゝ、旨くやりましたね、（ほんたうに  
 中洲からお運び遊ばすんぢやあ間に橋一個、お大抵  
 ではございません。）ツさ、え、旦那、先刻親方が  
 歸りました時に内のお婆さんが其通りいひました。  
 ねえ、親方、何うですお婆さん、寸分違はねえ、同  
 一こツたい、此奴あ面白えや。」と少しかすれた  
 聲、顔をしかめながら嬉しさうに笑つたのは、愛吉  
 といつて、頬に角のある、鼻の隆い、目の鋭い、眉  
 の迫つた、額の狭い、色の浅黒い、宛然惡黨の面だ  
 けれども、口許ばかりは其の仇氣なさ、乳首を含ま  
 したら今でもすや／＼と寐さうに見えて、之がため  
 に不思議に愛々しい、年の頃二十三四の小造で瘡ぎ  
 すなののが、中形の浴衣の汗になつて、垢染みた、左  
 の腕あたりに大きな焼穴のあるのを一枚引掛けて、  
 三尺の帯を尻下りに結び、前のめりの下駄の、板の  
 やうになつたのに拇指で螻を拵へたが、三下といふ  
 風なり。實は渡り者の下職人、左の手を懐に、右を  
 頤にあてゝ傾きながら、ばりかんを使ふ紋床の手  
 を其の鋭い眼で睨むやうにして見て居るのであつた。

客は向うへ足を伸して、

「然うだらう、人情は誰も同一だから言うふことも違はないんだよ。」

「ぢやあ何だ、内の母親も矢張同一やうなことを言つてませう、ふゝん、」と頤を支へたまゝ、頷くが如くに言つて笑を洩らす。

紋床は顔を斜に、ばりかんに頬をつけて、一寸撓めて、

「馬鹿をいひねえ、お前と同一にされて耐るもんか、人情は異らないでも遣り方が違つたらあな、おい、恚う見えても母親にや未だ米の値を知らせねえんだが、何うだ。」

「あれ、あんなことをいふよ、喃お槓。」  
と母親は傍なる女房に言葉を渡したらしい。

「ほゝゝほゝ。」と、氣の無さゝうに若い女が笑つた。と思ふと嬰兒がおぎやあと泣く。

紋床はばりかんの齒を透して、フツと吹き、

「おつと先づ黙つてあとを聞くことさ。然様米の値は知らせねえが、其かはりゞ高で言譯をさせますか。」

「違えねえね。」

「黙れ！ 手前が何だ、まあお聞きなさいまし、先生。」

客は此の近邊の場所には餘り似合はぬ學生風、何でも中洲に住んでるとより外悉しくは知らないが、久しい間の花主で紋床は唯背後の私立學校で一科目預つて居る人物と心得て、先生、先生と謂ふが、然にあらず、府下銀座通なる 某新聞の記者で、遠山金之助といふのである。

「何うでございます、此の私に意見をしてくれろつて、涙を流して頼みましたぜ、此の愛的の母親が、凡そ江戸市中廣しといへども、私が口から小可愧くもなく意見が出来ようといふなあ、其の厄介者ばかりでさ、昔だと賭場の上へ裸でひツくり返らうといふ奴なんで、」

「何を、詰らねえ、」

「否、賭博は遣りません、賭博は感心に遣りませ  
んが、其も何幾干かありや屹度はじめるんでさ、其  
に女にかゝらずね、尤もまあ、かゝり合をつけよう  
たツて、先様が取合はねえんですから其の方も心配  
はありませんが、飲むんです。此年紀で何と三升酒  
を被りまずぜ、可恐しい。さうしちやあ管を巻いて  
往來でひツくり返りまさ、病だね。愛、手前その病  
氣だけは治さないと不可えぜと、私あこれでも偶に  
アあ親身になつていふんです、すると何と、殺され  
ても恨まないから五合買つとくんない、と恚うで  
せう、言種が癪に障るぢやありませんか。」

愛吉は何にもいはず、腕を拱いて目を外して、苦言一針することに、内々恐縮の頸を竦める。

紋床は構はず棚下、

「活きるか死ぬかといふ之が情婦だつたつて、其ぢや愛想を盡しませう、おまけに此が行く先は、何處だつて目上の親方ばかりでさ、大概神妙にして居たつて、得て難癖が附かうてえ處で其の身持ちぢやあ、三日と置く氣遣はありやしません。尤も三日なんて置かうものなら、はじめの日は朝寐をして、次の夜は内をあけて、三晩目には持遁をしようといふもんだ。」

「まさか、」といつて客の金之助は仰向けに目を瞑る。

愛は小指のさきで耳朶を一寸搔いて、

「酷いなあ、親方。」

「まあ然ういつた形よ、人情は同一だから、」

「何が人情、」

「然うぢやないか、だつてお前眞似をするにも好いことはしたがらねえだらう、此間もね、先生、お聞きなさいまし。然ういふ風だから山手も下町も、千住の床屋でまで追出されやあがつて、王子へ行きますとね、一體さき／＼渡がついてるだけに此方人等の稼業はつきあひが難かしうがす、其だのにしばらく仕事をさして貰はうといふ其の初對面の許で、宿の中ほどの硝子戸をあけると、突然、私あ忙しい身體でござえして と凭うさ。」

何うです言種は、前かど博徒の人殺 兇 状 持 の挨拶といふもんです。其でなくツてさい此の風體 なんですもの、懐手でぬツと入りや、眞晝中でもね え先生、氣の弱い田舎なんざ、一人勝手から抜出し て総鎮守の角の交番へ届けに行かうといふんでせう。

此頃は閑だからと、早速がりを食つて奴さん行處 なし、飲んだ揚句なり、其晩はたうとうお宮の縁の下に寐ましたツさ。此眞似も又宜しく無えてね。

仕方が無えんで舞戻つて例の如く親方濟みません、  
が呆れたもんです。而して私が忙しい體でござえし  
て、と怗ういふ鹽梅に遣ツつけました。目を圓くし  
て驚きやあがつて、可笑うがしたぜ、飛んだ面白え  
やと、其を嬉しがつて居やあがる、始末にをへねへ  
やあゝりませんか。其が又似合ふんです、一寸こん  
な風、と紋床も好事也、ばりかんを持つたまゝ  
で仕事の最中。

「成程、」といつて金之助も故とらしく振返つ  
た。

愛は極悪げに、

「親方澤山だ、何も身振までするこたアありませ  
ん。」と愛くるしい件の口許で、べそを搔くやう  
な（へ）の字形。

「私にや素直だから可愛いんですがね。何うだ怗  
う改つて言はれちやあ餘り見ツとも好いこツち  
やあるめえ、些と氣をつけるが可いぜ、え、愛的。」

「可いやさ、罷違へばといふ覺があるから世の中

を何とも思はんだらう、中々可い腕があるんだつて  
いふぢやあないか。片腕ツていふ處だが、紋床の役  
介者は親方の兩腕だ、身に染みて遣りや餘所行の天  
窓を頼まれるツて言つて居たものがあるよ、何うだ  
い。」

「へ、何ういたして、恚うなると私あ  
極が悪い、と面を背けて、たじ／＼になつた罪  
の無さ。」

「此處等で發起をすることつた、又三晩ばかりあけ  
たといふぢやあないか。あのこゝな、」といふの  
が些と假聲に成りかけたので、此の場合吃驚し、紋  
床は聲を呑んでくすりと笑ふ。

「ですがね親方、今度ばかりや、」と愛吉は屹  
と眞面目。

「何<sup>ど</sup>うした。」  
「え、何<sup>なに</sup>ね、少<sup>すこ</sup>し面<sup>おも</sup>白<sup>しろ</sup>くねえ、馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>に癩<sup>しや</sup>なこ

#### 四

があつて、腹が立つて、私あ腹が立つてならねえんで、「と愛はいふ内にも其の迫つた眉を動かすのであつた。

紋床は、屢々あつて、珍しからぬ、愛吉が恚る様子に馴れて、いふことを何とも思はず、

「妙だな、お前また腹が立つて仕様がなから、そこで身體を寝かして居たらう。」

「親方、茶かさずにさ、全くだね、私あ何だ、演劇です敵ツてものは丁度こんなものだらうと思ひますぜ、ほんたうに親の敵。」

「可い氣なことを言つてらあ、お前母親は死んでやしねえぢやないか、父爺の敵なら中氣だらう、それとも母親なら、愛的、お前が其の當の敵だい。」

「何だつてね。」

「苦勞をさせるからよ。」

「氣が早いや親方、誰も權太左衛門に母親が斬ら

れたとは言やしません、私あ親の敵と思ふ位、小癩に障る奴が出来たツていふんです。」

「はてな。」

「其でね、出来るものならふん捕へて畜生 撲殺して遣らうと思つて、恚う胸ツくそが悪くツて、ぢつとして居られねえんで、眞個でさ、ふら／＼して歩行いたんで。」

「待ちねえ、おい、お前感心だな、はゝあ解つた、然うするとお前は大望のある身體だ、其の敵討をしようといふ。」

「然うですよ。」 と眞顔でいつた。

「然うですよもねえもんだ、何だな、其がために浮身を竄し、茶屋場の由良さんといった形で酔潰れて他愛々々よ。月が出て時鳥が鳴くのを機掛に、蒲鉾小屋を刎上げて、其の浴衣で出ようといふもんだな、はゝはゝ。」

「ようがすよ、もう澤山だ、何もそんなに改つて今日といふ今日、脂を取んなさるこたあねえ、食潰しの極道にやあ生れついて来たんだもの、天道様だつて数の知れねえ人形を拵へるんだ、削屑も出まさあね、」と正直なだけに怒りツばい、これでも未だ若いんだから、愛吉は拗ね氣味で横を向く。

「ほい、氣に障つたら堪忍しねえ、言つたつて治らねえ位のこたあ知つてるんだい、言葉の機よ、己だつて未だ人に意見を言ふ親仁形は役不足だ、可いや、喧嘩なら加勢をしよう、對手は何だ。」

「そ、其がね親方、」と忽ち嬉しさうな顔色で、  
「些と組合違ひの人間でさ。」

「ふむ、船頭か。」

「否。」

「馬士か。」

「詰らねえ。」

「まさか乳母どんぢやあるめえな。」

「親方、眞面目に聞いておくんないといふに。」

聞くだけで可いんだから、私あ又話すだけでも些  
少あ胸が透くだらうと思ふんで。へい、此處の處へ  
込上げて來やあがつて。「と手を懐にしたまゝ  
擴げた胸に斜にかゝつてる守の紐の下あたりを、は  
た／＼と叩いて見せる。

「可し／＼、私が聞かう、何うしたんだ。」

「先生、聞いておくんなさるかい、難有え、こり  
や先生だと猶わかりが早い、對手はね、先生なんざ  
御存じぢやありませんか、歌の師匠ですよ。」

紋床は口を挟んで、

「あゝ、中洲の清元の。なるほど此奴あ大望だ、  
親の敵より大事に違えねえ、しかし飛んだ氣になつ  
たぜ、愛、お前ありやあ不可えや、まるで組合が違  
つてらあ。」

「何がえ、親方。」

「お津賀さんのことだらう。」

「ありや、師匠ぢやありませんか。」

「唄の師匠よ。」

「何を、私なあ味噌一漉てえ奴なんです。」  
「味噌一漉？ あゝ三十一文字か。」  
「其の野郎だ。」  
と、愛吉は胸を張つた。

「歌の先生、三十一文字の野郎で、其が敵、へい、」とばかりで紋床も變に思ひ、金之助も其の意を得ない様子である。

愛吉は熱心に顯れ、

「先生、貴客知つて被在つしやりやしませんか、

其の三十一文字の野郎てえのを、」

「何といふね、而して何處の、」

「居る處は根岸なんで、」

「根岸か、」

「へい、根岸の加茂川互ツてんです。」

「加茂川互。」と金之助は口の裡で其の名を言

つた。

紋床は背後へ廻つて、

「神主様見てえだな。」

金之助は更めて打頷き、

「有名な先生だ、歌の、然う／＼。書も能くお書

きになるぜ。」

「知ツてますよ、手習師匠兼業の奴なんで、媽々

が西洋の音楽とやらを教へて、其の婆が又、小笠原  
禮法躰方、活花、茶の湯を商ふ、何でもごた／＼  
娘子の好きな者を商法にするツていひます。」

「はゝあ何でも屋だな、場末の荒物屋にやあ傘  
まで商つてら、行届いたものだ。虱でも買ひに行つ  
て捻つてやれ、癖にならあ、何うせ碌な者は賣るん  
ぢやあねえ。」と紋床は話が實で、ものになりさ  
うな卵だとして見て取ると、面白して大に煽る。

金之助は驚いて、

「馬鹿なことを言へ、罰の當つた、根岸の加茂川  
と来た日にやあ、歌の先生でも皆が御前々々と言ふ  
位なもんだ。宴會のあつた時、出て居た藝妓が加  
茂川さん一寸と言つたら、賣女風情が御前を捉へて  
加茂川さん、朋友でも呼ぶやうに失禮だ、と言つて、  
其の儘座敷を構はれた位な勢よ。高位高官の貴夫  
人令嬢方、解らなけりや、上ツ方の奥様姫様方、  
大勢お弟子があるツさ、場末の荒物屋と一所にされ  
て耐るもんか、途方もない。」

「何でも、馬車だの腕車だのが門に込合つてると謂ひますね。」

「然うだらうとも。」

「何だか知らねえが癩に障るツたら無いんです。」  
と愛吉は然も口惜しさうである。

「おい、其の方が敵かい。」

「お前又妙な敵を持つたもんだな、金と女なら私だつて殺してえほど怨があらあ、先の中洲の清元の師匠の口だと、私も片棒擔ぐんだが、困つたな歌の先生ぢやあ。お前何うした、狙つたか、」

「二晩ばかりつけました、上野の山ね、鶯谷ね、杖でも持ちやあがつて散歩とでも出掛けて見る、手前活しちやあ歸さねえつもりで、彼處等を張りましたけれど、出ませんや。弱つちまいました、親方の前だけでも。髪結床の下職なんぞするもんぢやありませんね、せめて字でも讀めりや何とか言つて近づくんですが、一の字は引張つて、十文字は組違へ、打違へは鷹の羽だと、呑込んで居るんぢやあ為方ありません、私あもう詰らねえ。」と力

なさゝうに投首なげくびをする。

「あゝ、お互たがひに不便ふびんなもんだ。」

「親方本當おやかたほんたうでございますね、酒さけの値ねは上りまさ、  
食たべる物ものは麵麩パンの附焼つけやき、鰻うなぎの天窓あたまさ、串戯じやうだんぐち 口くちでも利き  
かうてえ奴やつあ子守兒こもりっこかお三さんどんだ、愛あいちゃんなんて  
ふざけやあがつて、よか／＼の飴屋あめやが尻しりと間違まちがへて  
やあがる、へ、お忝かたじけ。」 といつて、愛吉あいきちはフンと  
棄鉢すてばちの鼻息はないき。

「あいや、敵討かたきうちのお武家ぶけ、些ちとお話はなしが反それまし  
たやうですが、加茂川かもがはが何か君きみに恥辱ちじよくでも與あたへたと  
いふのかい、」

「然さうです、恥はちを搔かかしやがつたんで、對手あひては女をんな  
ですよ。」

「何なに、女をんなに恥辱ちじよくを、待まて、質たちの好よくない奴やつだ。」

丁度洗ちやうどあらひませうといふ處ところ、金之助きんのすけは膝ひざを叩たき、四あ  
邊りを拂はつて、ついと立たつた。

「や、先生も味方らしい、此奴あ、難有えぞ／＼」

戴いたのは新しい夏帽子、着たのは中形の浴衣であるが、屹と改まつた様子で、五ツ紋の黒絹の羽織、白足袋、表打の駒下駄、蝙蝠傘を持つたのが、根岸御院殿寄の唯ある横町を入つて、五ツ目の冠木門の前に立つた。

「其處です、」

と、背後から聲を懸けたのは、二度目を配る夕景の牛乳屋の若者で、言ひ棄てると共に一軒置いて隣邸へ入つた。惟、ふに此の横町へ曲らうといふ邊で、處を聞いたものらしい。加茂川の邸へはじめの客と見える、件の五ツ紋の青年は、立停つて前後をニして猶豫つて居たのであるが、今牛乳屋に教へられたので振り向いて、

「は、」と、頷くと齊しく門を開けて透して見る、と取着が白木の新しい格子戸、引込んで奥深く門から敷石が敷いてある。右は黒板塀で此内に井戸、湯殿などがあらうといふ、左は竹垣で此處から押廻して庭、向うに折曲つて縁側が見えた。

一體何時も此の邸の門前には、馬車か、俵か、當世の玉の輿の着いて居ないことはない。居廻の者は誰謂ふとなく加茂川の横町を、根岸の馬車新道と稱へて、其の狭められるために、豆腐屋油屋など、荷のある輩は通行をしない位であるが、今日は日曜故か、最う晩方である為か、内も外も人少なげに森として、土塀の屋根、樹の蔭などには、二ツ三ツ蚊の聲が聞えた。

然れば敷石を鳴す穿物に音立て、五ツ紋の青年はつか／＼と其の格子戸の前。

丁度此處へ立つた時分に、今開けた門の、から／＼と鳴る、ばねつきの鈴の音が止んで、恰も可し、玄關へ書生が取りつき、次に顯れて、敢てものを言ふまでもない。

黙つて、坐つて、手を支いて、顔を見て、澄して控へる。

青年は格子戸を半ば引いたまゝで、慇懃に小腰を屈め、

「御免下さいまし。」

「はい。」

「え、お友達、御免下さいまし、御當家、」

と極つて切口上で言出した。調子もをかしく、其の蝙蝠傘を脇挟んだ様子、朝夕立入る在來の男女とは、太く行方を異にする、案ずるに蓋し北海道あたりから先生の名を慕つて來た者だらうと、取次は瞠めたのである。

青年は益々鄭重、

「如何でございませうか、お友達、御當家先生様にお目通が出來ますでございませうか。」

「貴方は何方から、」

「え、手前事は、え、何でございまして、其の彼でございますよ。」

「はい、」

人の内の取次といふものは、如何なる場合にも眞面目なものなり。

「お友達御免を蒙ります、手前は其の日本橋人形

町通り、勝山と申しまして、」

「勝山さん、」 取次は聞き馴れないといふ顔色。

「否、手前が其の勝山と申すんぢやあございませ  
るので、」

「はゝあ、」

「御當家先生様の、えゝ、お弟子でございました、  
其の勝山と申しますお嬢さんから一寸頼まりました、  
手前使の者でございます、少々お目に懸りたうござ  
います、お宅で被在やいませうか、お友達、お取  
次を願ひたう存じますんで、へい。」

「先生はお宅ですが、一寸お待ち下さい、」と  
妙な顔をして取次はくるりと入つた、青年は我を忘  
れた風でひよいと其の頸を竦めたが、立直つて、え  
へん内證の咳一咳。

## 七

「さあ、此方へ、私が加茂川で。はあ、」と仰向いて挨拶をする。之は敢て人を輕蔑するのでもなく、又自ら尊大にするのでもない。加茂川は鬼神の心をも和ぐるといふ歌人であるのみならず、其の氣立が優しく、其の容貌も優しいので、鼻下、頤に髯は貯へて居るが、それさへ人柄に依つて威嚴的に可恐しうはなく、却つて百人一首中なる大宮人の生した其のやうに、見る者をして古代優美の感を起さしむる、但し些と四角な顔で、脣は厚く、鼻は扁い、とばかりでは甚だ野卑に、且つ下俗に聞えるけれども、靜に聞召せ、色が白い。

これで七難を隠すといふのに、嬰兒も懐くべき目附と眉の形の物やかさ。人は皆鴨川（一に加茂川に造る、）君の詞藻は、其の眉宇の間に溢れると謂ふのである。

恁る優美な人物が、客に對するに（はあ、）の調子で仰向くとなつては、聊か性格に於て矛盾す

るやうであるが、之をいふ前に、其の和のある優しい一雙の慈眼を（はあ、）と同時に絲のやうに細うして恰む眠るが如くに装ふことを斷つて置かねばならぬ。

其上に如何なれば然するかの理由を説明したら、益々鴨川の奥床しい用意のほどが知れるであらう。

紋床でも噂があつた、尚此の横町を馬車新道と稱へるのでも解る、弟子の数が極めて多い。殊に華族豪商、いづれも上流の人達で、歌と云へば自然十が九ツまで女流である。

其のみならず、令夫人が音楽を教へて、後室が茶の湯生花の指南をするのであるから。

若き時は之を戒むる色にありで、師弟の間でも此の道は又格別。花の如く、玉の如き顔に對して、初恋、忍戀、互思戀などいふ、安からぬ席題を課すやうな場合に、どんな手爾遠波の間違が出來ぬとも限らぬ。人木石にあらず己も男だ、何も下司にタンカを切つたわけではない。歌人が自分で深く慮り、すべて婦人の弟子に對する節は、

いつも其の紅、白粉、簪、細い手、雪なす頂、  
帯、八口を溢れる紅、褌、帯揚の工合などに、  
うつかりとも目の留まらぬやう、仰向いて眼を塞ぐ  
のが、因習の久しき、終に性質となつたのである。  
尤も有数の秀才で、凡そ年紀二十ばかりの時から弟  
子を取立てた。十年一日の如く、敬すべき尊むべき  
感謝すべき心懸けであるから、音楽に長けたる鴨川  
夫人が、嘗て弟子の中の一人であつたことを以て、  
毫も先生の品行を怪んではならぬ。

世には夫人が、おもて向き結婚してから八月目と  
いふのに、女兒を流産したといつて、云々する者も  
あるけれども、經典に言はずや、鶴は相見て乃ち孕  
む、それ歌人は此の濁世に處して、恰も鳶鳥の中に  
於ける鶴の如きものであるから、結婚の以前、既に  
疾く兒を宿さぬといふ數はあるまい、従つて八月で  
流産しないとも限らぬのである。夫人は名を才子と  
いふ、細川氏、父君は以前南方に知事たりしもの、  
當時然る會社の副頭取を勤めて居らるゝ。此の名望  
家の令嬢で、此の先生の令閨で、其上音楽の名手  
と謂へば風采のほども推量られる、次の室の葭戸の

あなたに薔薇の薫ほのかにして、時めく氣勢は其であらう。

五ツ紋の青年は、先刻門内から左に見えた、縁側づきの六疊に畏つて、件の葭戸を見返るなどの不作法はせず、恭しく手を支いて、

「はじめましてお目に懸ります。」

「はあ、貴方が其の勝山さんのお使？」と大人は紅革の夏蒲團の上に泰悠におはす。此方は五ツ紋の肩をすばめるまで謹んで、

「然様でございます、へい。」

「御親類の方ですかね。」

「否、親類と申しますでもございませぬが、些と懇意に致しますもので、つい此の坂下まで手前用事で参りましたに就いて、彼家から頼まれて、先生様の御邸へ伺ひますやうに、豫てお世話に相成ります御禮を申上げますやう、又何卒何分お願い申上げまするやうにと、ことづかりましたんで、へい、めつきりお暑うございますな、」といひながら、袂を探ると白地の手拭を取出して額を拭つた。

「はあ、何、其はわざ／＼。」

「實は母親が参ります筈なんでございますが、一體此の兎角病身な上、貧乏暇なし、手もございま

せん處ところから、相濟あひすみませんが失禮しつれいをいたしまして、「  
といひかけて又額またひたひの汗あせを。見る處ところ人形にんぎやう町居廻ちやうあまは  
りから使つかひに頼たのまれたといふが堅氣かたぎの商人あきんどとも見え、  
米屋町邊こめやまちへんの手代てだいとも見え、中小僧ちうこそうといふ柄がらにあら  
ず、書生しよせいでは無むろん論ろんない。年若としわかには似にない克明こくめいな口上こうじやう  
振ぶり、時々とき／＼ものいひの澁しぶるといひ、何なんでも口上くちにつしに  
口上こうじやうを習ならつて路々みち／＼暗誦あんしようでもして來きたものらしい。

慚かゝる肌違はだちがひのものに對たいしては、鴨川かもがは大人口うしくちを開あいて、  
敢あへて上五文字かみもんじをも吐はくに當あたらず、

「はあ、」とばかりである。

葭戸よしどを下したの方ほうから密そつと開あけて、大形おほがたの茶碗ちやわんの底そこへ、  
ぼつちり入はいつた結構けつこうらしいのを、疊たゞみの上うへへ、近すへらす  
やうにして客きやくの前まへに推おして据すゑた、高島田たかしまだの面長おもながで  
色いろの白しろい、品ひんの可いい、高等かうとうな中形ちうがたの浴衣ゆかた、帯おびをお太たい  
鼓こに結むすんだ十九じゅうばかりの美人びじん。

五ツ紋もんの青年わかものは、斜なぐめに一ちよつと寸見みたばかりで、はツと  
言いつて頭かづへを下さげ、

「恐入おそれいります奥様おくさま、えゝお控ひかへ下くださいまし、手前てまへ

から申上げます、日本橋區人形町通、」と俯向いたまゝ手をついて言つた。

茶を持つて出た美人は、敷居の外へ半分ばかり出した膝を揃へて支いたまゝ、呆氣に取られたが、上目づかひで鴨川の面を窺ふと、渠は目を瞑つて俯向きながら、頤鬚のむしやとある中へ苦笑を包んで、「可し、」と頷いて見せたので、葭戸を閉てゝすつと消える。

「小間使でありますよ。」と教へたが、耐りかねたか、ふゝと笑つた。青年の茫然拍子抜のした顔を上げた時、奥の方で女の笑聲。

此方は面を赤うして、手拭を持つた手を額にあて、「之は何うも、手前不束ものでございます、へい、實は奥様にはお目に懸つて能く御禮をと申しつけられましたものでございますから。えゝ、何でございませうか、奥様はお邸で被在しやいませうか。」

「はあ、居りますが。」

「如何でございませう、一寸お目に、」と御身  
分柄、お家柄、総じては日本の國風を心得ないこと  
を言ふのである。

鴨川は眉を顰めたが、然あらぬ調子で、

「面會 日は別にあるです。」

「へい？」

「彼が皆様に別に面會しますのは水曜の午後で

す。」

「水曜の午後でございますか。」

鴨川は至極冷淡に、

「はあ、」

五ツ紋の青年は何か仔細ありげに、不心服の色を  
露はした。

「ですが、何も別してお手間は取らせません、一寸如何でございませう。」

「誰にも皆然ういふことになつて居るですから、」

「へい、御尤様ですが、其處ン處を其のお繰合せ下さいまして。」

「斷つてお逢ひなさいたい！？」と鴨川大人士づばりとなる。

五ツ紋は慌てた形で、

「否、斷つてと申す譯ではございません。」

「而して何の用ですな。」と改まつて尋ねられた。

「其勝山から託りましたので、奥様にもお目にかゝつて御挨拶を。」

「はあ、何、其なれば別にお會ひ下さるにも及びませんですよ、私から申聞けませう。而して遠い處を態々おいで下さるにも及ばんでした、貴方御苦勞でしたな、宜しく何うぞ、些とこれから出懸けんけ

ればならんですから。」

歌人の住居も早や黄昏れるので、そろ／＼蚊遣で  
逐出を懸け給へば、圖々しいやうな、世馴れないや  
うな、世事に疎いやうな、又馬鹿律義でもあるやう  
な、腰を据ゑた青年も有繫に其と推した様子で、

「之は何うも飛んだお邪魔をいたしましたまでござい  
ます、勝山の彼の娘も不束なものでございますから、  
何うぞ又先生様、何分、」と、爰で又びつたりと  
平蜘蛛。

「はあ、其は宜しい、」と最う片膝を立てさう  
にする。

青年も座を開いて一寸中腰になつたが、懐に手  
入れると、長方形の奉書包、真中へ紅白の水引を  
懸けてきりゝとした貫目のあるのを引出して、掌に  
据ゑ直し、載せるために差して来たか、今まで風も  
入れなんだ扇子を抜いて、ばら／＼と開くと、恭し  
く要を向うざまに疊の上に押出して、

「輕少でございますが、何うぞお納を。」

唯見ると金子五千疋、明治の相場で拾圓若干を、  
故と古風に書いてある。

「あゝ、恚ういふことをなすつては可けません、  
其の為に、ちやんと月謝をお入れになることにして  
あります。」

「然様有仰りましてはお可愧うございます、誠に  
お粗末で、何うぞ差置かれまし。」

「然うですか、皆様に最う豫てお断がしてあるん  
だのに、何か恚ういふ御心配をなさるから困るよ、  
あゝ、兎角御婦人方は、」と云ひながら、其の細  
い目で弗と葭戸の内を見つけた。

「おゝ、お才、其處に お前差支へがな  
くば一寸お逢ひなさい、此方で、」と聲を懸ける。

「唯、」  
と案内軽い返事、さや／＼と衣の音がして葭戸越  
に立姿が近いたが、さらりと開けて、浴衣がけの涼  
しい服装、緋の菱田鹿の子の帯揚げをし、夜會結びの

毛筋の通つた、色が白い上に雪に香のする粧をして、  
艶麗に座に着いたのは、令夫人才子である。

「被入やい、誰方、」と可愛い目で連合の顔を  
一寸見る、年紀は二十七ださうだが、小造で、其で  
緋の菱田鹿の子の帯揚といふ好であるから、二十そ  
こ／＼に見える位、尤も十九の時兒鬢に結つた姫で、  
見る者は十四か五とよりは思はなかつた。早朝上野  
の不忍の池の蓮見に歩行いて、草の露の最と繁きに  
片樓を取り上げた白脛を背後から見て、既に成女の  
肉肉であるのに一驚を喫した書生がある、其の時分  
から今も相變らず、美しい、若々しい。

不意の見参といひ、特に先刻小間使を見てさへ低  
頭平身した青年の、何とて本尊に對して恐入らざる  
べき。黙つて額着くと、鴨川大人は御自慢の細君、  
然もあらむといふ顔色、ぐツと澄して、

「勝山さんの使の方です。」

「然う、貴方能く被入しやいましたね、勝山さん、那のお夏さん、お變りはないの、あゝ、つい此間おいでなすつたのね。」と以ての外御懇のお言葉。

「人形町からでは随分ある。」と鴨川は打額

く。

「貴方も那の邊なんですか。」

青年はやつと口が利けた。

「へい、近所でございまして、」

「遠いんですね、腕車でも随分暑かつたでせう、

宅に居りましても今日あたりはまた格別なんです、」

といひながら純白な麻を細く襲ねた、浴衣でも上品な襟を扱いて背後を振向き、

「定や、團扇を持つておいで。」

小造な若い令夫人は聲を懸けて向直つたが返事をしなかつたので、

「貴方懾り様ですが呼鈴を、」とお睦まじい。

すなわ ちかたはら 即ち傍なる一閃張の机、こゝで書見をするとも見  
えず、帙入の歌の集、蒔繪の巻蓑入、銀の吸殻落  
などを竝べてある中の呼鈴を丁と強く、あと二ツを  
軽く、三ツ押すと、チン、リンリンリン ー と  
鳴る、ばた／＼と急いで来て、

「はい、」 といつて顔を出した以前の小間使、  
先刻意を了したと見えて二本ばかり團扇を其へ差出  
す折から、縁側に登音して、奥の方から近いたが、  
臆て此の座敷の前の縁、庭樹を籠めて何となく、隣  
家のもあるか蚊遣の煙の薄りと夏の夕を染めたる  
中へ、紗であらう、被布を召した白髪を切下げの媼、  
見るから氣高い御老體。

其ともつかぬ状で座敷を見入つたが、  
「御客様かい、貴方御免なさいよ。」 といつて  
座に着いた。

「灯をね、」 と顔をさし寄せて、令夫人は低聲  
でいふ。

夕暮の徒然、老母も期せずして此處に會したので、  
敢て音楽に關して弟子に對する他は、面會 日が水

曜えうと觸ふれの出でた令夫人れいふじんが、次つきの室へやに居あ合せたり、奥深おくふかく世よを避さけておはす老母らうぼが縁側えんがはに來き合せたりするの  
が、謝禮金しやれいきん五千疋びきを持參ぢさんの者ものに對たいする鴨川家かもがはの家風かふう  
ではない。青年わかものは蓋けだし期きせずして拝顔はいがんを得えたのであ  
つた。

「お初はつに。何方どちらの、」 と之これも鴨川かもがはを一寸御覽ちよつとごらんず  
る。

「勝山かつやまさんのお使つかひですつて、」 と令夫人れいふじん傍そばから  
引取ひきとつて引合ひきあはせる。

「おゝ、あの何なにか江戸えどツ子この、いつも前掛まへかけけでお  
いでなさる、活潑くわつぱつな、ふアふアふア、」 と笑わらつて、  
鯉こひが麩ふを呑のんだやうな口附くちつきをする。

唯一とひとり人でさへ太刀打たちうちのむづかしい段違だんちがひの對手あひてが、  
爰こゝに鼎かなへと座ざを組くんで、三面六臂めんろくべとなつたので、青年わかもの  
は身みの置場おきばに窮きうした形かたちで、汗あせを拭ふき、押拭おしぬぐひ、  
「へい飛とんだ御厄介ごやくかい様さまで、からもうお轉婆てんばでござ  
いますて、」

「可いいさ。だがの、内うちなぞは傍はたのおつきあひがお

つきあひぢやで、其處は又な、御婦人ぢやから直接  
にいつては赤い顔でもなさると悪いで申さんぢやつ  
たが、前掛は止して袴になさるなぞは、先づ

第一のお心懸ぢやよ。いや、しかし貴方の

前ぢやけれどもお夏さんは珍しい御容色よし、ほんの  
こと内なぞはおつきあひがおつきあひぢやから、御  
華族様から大商人方の弟子も澤山見えるけれど、品  
といひ様子といひ彼のお娘が一番ぢや。能くしたも  
ので、上の方はまあ少々はおでこでも其處は事が濟  
みますが、下々の娘が出世をしようといふには、さ  
らりと打明けた處で容色ぢや。面ぢやの、ふアふア  
ふア、お夏さんなぞは心懸 次 第又  
どんな出世でも出来るのぢや、此方へ出入つてござ  
ればおつきあひがおつきあひぢやから、ふアふアふ  
ア。と鯉呑麩の口、蕪村が所謂巨口玉を吐く鱸  
と相似て非なるもの也。

青年は之に答ふる術も知らぬ状に、唯じろ／＼と後室の顔を瞻つたが、口よりは先づ身を開いて逡巡して、

「えゝ、からもう、」といふばかり、逡巡の上  
に、尚ほもぢ／＼。

「一體何ちや、内へござる他の方とは些と氣風が違つて居なざるから、其の邊が何となく御身分のあ  
る方とはお交際がなさり悪いのぢや、其も心懸一ツ  
で、の、あゝ何うともなります。」と念を入れて  
喋舌れば顔も動くし、白い切髪も動いたのである。

「然やうでございませうか、へい、」といつて  
此の泥に酔つたやうな、哀な、腑効ない青年は、又  
額を拭つた。汗は流るゝばかり、殆ど取亂した形に  
見えたので、夫人才子は、さすがに笑止とや思しけ  
む、

「貴方まあお羽織をお脱ぎなさいませよ。」と  
深切におつしやりながら、團扇使の片手煽に、風を

繰るが如くそよ／＼と右左。

勿體ない、此の風にさへ腰も据らないほど場打の  
して居る者の、恚る待遇に會して何と處すべき。

青年はそは／＼したが、何時の間にか胸紐を外し  
て、其の五ツ紋を背後にはらりと、肩を、迂らして  
脱いだのである。

「ぢやあ御免を被つて遣つけますぜ。」と素天  
邊にぞんざいな口を切つて、袂の下を潜らすと、脱  
いだ羽織を前へ廻して、臆面もなく、あなた方の鼎  
に坐つた眞中で、裏返しにしてふわりと擴げた。言  
語道斷、腕まくりで膝を立て。

「借もんだからね、皺にしちやあ動きが取れませ  
んや、」と、切上つた眦に筋を集めてニヤリと笑  
つた。

餘りの思懸けなさに、鴨川の一家、座にある三人、  
呆氣に取られる隙もなく、唯ばかりに目を見合せた。  
中にも才子は其の衝に當つたから、風が止んだやう

にぢつとする。

青年は身を斜めに、肩を揺つて才子に突懸け、

「煽ぎねえ、へ、奇代な風だ、心持の可い日和だ

い。遠慮をすることあねえぜ。恚う聞きねえ、實は

其の團扇使を待つてたんだ、様あ見やがれ、」と

いふと、險のある目を屹と見据ゑ、今なほ座中に横

はつて、墨色も鮮に、五千疋とある奉書包に集めた

瞳を、人指指の尖で三方へ突き廻し、

「誰を煽いだつもりだよ、五千疋のお使者が御紋

服の旦那だと思ふと、憚ながら違ひます。目先の

見えねえ奴等ぢやあねえか、何だと思つてやあがる

んだ。手前ことはね、おい、御當所は人形町通よ、

赤煉瓦の學校裏、紋床に役介になつて居る下剋の愛

吉てえ、しがねえものよ。串戯ぢやあねえ、紙包の

上書ばかり下目づかひで見ないで、些たあ御人體

を見て物を謂ひねえ。」

「これ！」と向直つて膝に手を置いた、後室は

育柄、長刀の一手も心得て居るかして氣が強い。

「何を。」

「何ぢやな、汝は一體、」と大人は正面に腕を組む。令夫人はものもいはず衝と後向きになり給ふ。後室は聲鋭く、

「無法者め！」

「いよ。お婆々、聞えます／＼、」

羽織を脱いで本性をあらはした、紋床の愛吉は薄笑をして、

「歌の先生、何うだ歌先、一寸奥さん、はゝゝは今日ア」と、けるりと天井を仰いだが、陶然として酔へる顔色、フンといつて中音になり、

「―― 九は病五七の雨に四ツひでりサ

――

## 十二

襖も疊も天井も黄昏の色が籠つたのに、座はたゞ  
 白け返つた處へ、一道の火光 颯と葭戸を透いて、  
 やがて臺附の洋燈を其へ、小間使の光は、團扇を手  
 にしたまゝ背向になつて居る才子の傍へ、そつと差  
 置いて退らうとする。

「待ちねえ。」といふが疾いか、愛吉は手を伸  
 して無手と其の袂を捉へた。

「あれ、」

「遁げるない、何うだ、謂ふことを肯かねえか、  
 應といやあ夫婦になるぜ。」

「御串戯を遊ばし、」と女中は何事も知ら  
 ないのであるから、つい通りの客とばかり、酒も飲

まないのにと、驚いて變に思ふ。

「何、串戲なものか眞劍だ、ずっと寄んねえ、内證話は近い方がい、」と、ぐいと引くと、身體が斜に靡く處を、足を擧げて小間使の膝の上に乗せた、傍若無人の振舞。

「何をするか、」  
「光！」と堪り兼て大人と後室、一は無法者を、一は小間使を、殆ど同時に同音に叱咤した。

小間使こそ、膝は犯される、主人には叱られる、ばた／＼と身を悶え、命の瀬戸際と振放してフィと遁げた。

愛吉は胸を反し、脚を投出したまゝ哄然として、  
「はゝゝゝおもしろい、汝！嫌はれて何がおもしろい。畜生、」と自ら嘲つて、嚏を仕揖つたやうに眉を擧め、口をゆがめて頬桁をびつしやり平手でくらはし、

「様あねえ、こんなお大名の内にも感心に話せさ

うなのが居ると思つたが矢張りいけねえ、ぐうたらのおたんちんだ。我が顔つきが氣に喰はねえさうだ、分らねえ阿魔ぢやあねえか。やい、「と才子が踵をかさねた腰に近き、其の脚で疊を蹴たが、頤を突出した反身の顔を、鴨川と後室の方へ捻向けて、

「汝等一體節穴を盗んで来て鼻の兩方へ御丁寧に竝べてやあがるな。きよろ／＼するな、恚う睨むない、蛙になるぜえ、黙つて目を瞑つて、耳の穴を開けて聞け。私等が畠のよ、勝山さんのお夏さんを何だと思つてるんだ、何と見損ひやあがつたい、いけ巫山戯た眞似をしやあがつて、何だ小股がしまつてりや附合がむづかしい？ べらぼうめ、憚んながら大橋から此方の床屋はな、山の手の新店だつても田舎の渡 職人と附合はしねえんだ、おともたち、お氣の毒だが附合は此方でお斷だ。

其もよ、行儀なら行儀をしつけようてえ眞實からした事なら、何うせお前達はお夏さんにやあお師匠様だ、先生だ、私が紋床の拭掃除をするのと異りはねえ、體操でも何でもすら。然うぢやあねえか、是

がな、お前か、婆か、又此の御新造様なら仔細はねえ、よしんば仔細があつた處で泣く子と地頭だ、彼是いつて来る筋ぢやあねえ。へん、何曜日とやらの午後でなくつちやあ面あ出さねえとおつしやる方が少しばかり實のある紙包が出ると、忽ちおひきつけへ出てござつて、何うだい、下剋の此の愛的を團扇で煽ぐだらうぢやねえか。

第一、婆

の空お世辭が氣にくはねえや、何ていふ口つきだ、最う一度あの、ふアふアを遣らねえか。いや、譬へやうのない變な聲だぜ、其の饞舌る時の齒ぐきの工合な、先生様の嫌な目つきよ、奥方の此の足のうらまでちやんと探鑿が届いて、五千疋で退治に來たんだ、さあ、尋常に覺悟をしやがれ、此奴等！」

愛吉は瘦せたのを高胡坐に組んで開き直る。

「震へるない／＼、何も然う、鮭の天窓を刻むやうにぶり／＼するこたあねえ、なぐり込に來たのなら、禪がけで顱卷よ、剃刀でも用意をして居らあ。

生命に別條は無えんだから騒ぐにやあ當らねえ、おう、奥様一寸、おい、先刻のやうにお暑うございまして何かとか 謂つて、其の團扇で私をば煽いでくんなえ、煽ぎねえよ、さあ煽げ、煽げ、煽がねえかい。」

と、愛吉は目の色の變るまで對手の三人を屹と睨めて、手も足も突張返つた。

「母様、」と才子は衝と身を起しざまに、愛吉を除けて起つた。

「貴郎もお立ちなさいまし、狂人ですわ。」と、さも侮り輕んじた如き調子で落しめて言ふのに和して、

「狂人だ。」

「うむ狂人ぢや、巡查に引渡すが可いぢやる。」

「さあ、引渡せ、然うでなきやあ團扇で煽げ、」  
と愛吉は仰向けに寝て大の字形、挺でも動きさうな様子は無い。謂ふ處に依れば才子に思ふ様煽がせさへすれば、疊に生した根も葉も無く、愛吉は退散しさうに見える。

按ずるに煽ぐといふ字は火偏に扇である、然れば益す奴の焰が盛になつても、消えて鎮まるべき道理はないが、其の恚ることをいひ、然ることを為すは、深き仔細があつたので。

愛吉は紋床で謂つた、鴨川は其の敵で親の仇とも思ふ怨がある、其は渠が豫て愛顧を蒙る勝山の女お夏といふのに就いたことである。

今より五日ばかりの前、振袖立矢の字、兒鬚、高島田、夜會結などいふ此家に入りの弟子達とは太く趣の異なつた、銀杏返の飾らないのが、中形の浴衣に縷子の帯、二枚裏の雪駄穿、紫の風呂敷包、清書を入れたのを小さく結んで、之をまくり手にした透通るやうに色の白い二の腕にかけて、其手に日傘を

さした下町の女風、服装より容色の目立つのが一人、馬車新道へ入つて来たことがあらう、其がお夏であつた。

お夏は人形町通の裏町から出て、其の日、日本橋で鐵道馬車に乗つて上野で下りたが、山下、坂本通は人足繁く、日蔭はなし、停車場居廻の車夫の目も煩いので、根岸へ行くのに道を黒門に取つて、公園を横切つた。

あとさき路は歩いたり、中の馬車も人の出入、半月ばかりの早續きで熱けた砂を装つたやうな東京の市街の一面に、一條足跡を印して過つたから、砂は浴びる、埃はかゝる、汗にはなる、分けて足のうらのざら／＼するのが堪難い、生來の潔癖、茂の動く涼しい風にも眉を顰めて歩を移すと、博物館の此方、時事新報の大看板のある樹立の下に、吹上げの井戸があつて、樋の口から溢れる水が恰も水晶を手繰るやう。

お夏は翳して居た日傘の柄を横に倒して熟と見た

が、右手に商品陳列所の外圍が白ずんで、窓々の硝子がばやけて見えるばかりか、蟬の聲さへ地の下に沈んで、人氣はなく、近づいて来る蹺音もしない。尤も此處に来る道で谷中から朝顔の鉢を配る荷車三臺に行逢つたばかりであるから、其まゝ日傘を地上へ投げるやうに置いて、お夏は吻といきをついた。

十四

腕かひなにかけて居あた紫むらさきの風呂敷ふうろしきつゝみ包みは、輪わを外はずして日傘ひがさの上うへ。お夏なつは袂たもとから手巾はんけちを出だして、件くだんの水みづに浸ひたしながら、手てを拭ぬぐひ、襟えりを拭ぬぐひ、胸むねを拭ぬぐひ、足あしを冷ひやして埃ほこりを洗あらつて、颯さつとあとを絞しぼりだ出したが、懐ふところにせむも袂たもとにせむも、びつしより濡ぬれて居あるから、手巾はんけちを其そのまゝ日傘ひがさの柄えに持もち添そへて、氣き輕がるに雪踏せつたちやら／＼と、鴨川かもがはが根岸ねぎしの家うちへ急いそいだのであつた。

鶯谷うぐいすだにを下おりて御院殿ごゐんでんを傍かたへに見みて、彼かの横町よこぢやうへ入はいると中なかはどの鴨川かもがはの門もんの前まへに、二頭立とうだての馬車ばしやが一臺だい、幅はば一杯ぱいになつて着ついて居あた。

月つきに三度さんど或あるひは二度にど、十四じゅうしから通かようて二十はたちの今いままで、所謂いわゆる玉たまの輿こしが此この門もんに在あることは、敢あへて珍めづらしくはないのであつたが、恚いかくまで道みちを塞ふさいで、縦ほしいまゝに横よこ附つけになつて居あたのは、はじめで。

固もとより豆腐賣とうふうり、油屋あぶらやなど、荷にのある類たぐひは豫あらかじめ此この一ひと條じょうの横町よこぢやうは使つかはぬことになつて居あるけれども、

ひとり、別けて肩幅の細りした女、車の齒を抜けても入られさうに見えるけれども、遅しい鼠色の馬の面が、小鼻を動かして、呼吸を吹いて正面に門の處に並んで居るので、お夏は日傘を楯にして彼方此方隙間を差覗くが如くにしながら進みかねた。

（何誰か、一寸、私、用があるんですから。）  
聲を懸けると三人が三人、三體の羅漢のやうに、御者臺の上と下に佛頂面を並べたのが、じろりと見て、中にも薄髯のある一體が、  
（用があるなら勝手口へ廻れ、）とつゝけんどんに陀羅尼音でいつたのである。

對手は馬二匹と男が三人、はじめから氣を吞まれてお夏は、  
（はい、）といつて、小戻をして、黒塀の板戸の角、鴨川勝手口とある處へ引返したが、何となく其の首を垂れた。

然れば誰憚るといふではないが、戸を開けるのも極めて内端ぢやあつたけれども、これが又臺所の板

の間に足を踏延ばし、口を開けて眦を垂れて居た、  
八ツさがりの飯炊の耳には恐しく響いたので、  
（騒々しいぢやあないか、誰だよ。）と頓興に、  
驚かされた腹立紛れ。勝手口から入るものには、此  
位なことをいつて差支へないのであらう。

（お休みの處を、濟みません、）と丁寧ていねいに小腰こゝしを屈かめて挨拶あいさつをしたが、うつかり禁句きんくとは心着こころづかなかつた。飯炊めしたきは面つらを膨ふくらして、

（へむ、ちやぶ屋やの姉ねえさんぢやあるまいし、夜更よふけにお客きやくは取りとりませんからね、晝間ひるま寐ねたりなんかしませんよ、はい、憚は様さまでございますよ、空あいたのは其そ處こに出だしてあら、）といひすてに伸のびをして、ふてくされてふいと立たつた。小間使こまづかひはともあれ半季はんきがはりの下働したはたらきは、上かみの弟子でしなる勝山かつやまさへを知らずして、其その浴衣ゆかた、其その帯おび、其その雪踏せつた、殊ことに寢惚ねぼけ目めなり、おひるに何か取とつたらしい、近い邊あたりの鳥屋とりやの女中ぢよちゆうと間違まちへたのである。お夏なつは思おもはず、芙蓉ふようの顔かに紅くれなゐを灌そいだ。

飯炊めしたきが居ゐなくなつては袴はかまを穿はいた例いづもの書生しよせいが取次とりつぎ

に出る場所ではない、勝手は分らず、銜へて振りつ  
けられたやうな山出しのむく犬を、又呼び出さうと  
いふ聲は持たず、お夏は人いきれに惱んだ如くうつ  
かりしてゐんだが、我知らずうるんだ目の眦の切れ  
たので左手を見ると、見透さるゝ庭の模様、百合の  
花にも、松の木の振にも、何となく見覚えがある、  
確に座敷から眺めの處、師の君は彼處にこそ。

お夏は身を忍ぶが如く思ひなしつつ。

十五

鳳仙花の、草に雑つて二並ばかり紅白の咲きこぼ  
るゝ土塀際を斜に切つて、小さな築山の裾を繞ると  
池がある。此の汀を蔽うて棚の上に蔓り重る葡萄の  
葉蔭に、未だ薄々と開いたまゝ、花壇の鉢に朝顔の  
淡きが種々。

恰もその大輪を被いだやう、紹の羅に紅の襦袢を  
透して、濃いお納戸地に銀泥を以て水に撫子を描い  
た繻珍の帯を、背に高々と、紫菱田鹿の子の帯  
上を派手に結んだ、高島田で品の可い、縁側を横に  
して風采四邊を拂ふのが、飛石にかゝると眩くお夏  
の瞳に映じた。

机を置いて之に對し、浴衣に縮緬の扱帯をしめて、  
肱をつき、仰げざまの目を瞑るが如くなるは、謂ふ  
までもなく鴨川であつた。

二人の中に、稍座を開いて控へたのは、即ち是れ  
才子の御方。

お夏は蝶々齧の頃から來馴れて居るし、殊に爾時  
三人が座を構へたる一室の如き、何時も入込に教を  
授かる、居心の知れた座敷ではあつたけれども、不  
斷とは勝手が違つた庭口から案内なしの推參である  
上に、門でも裏でも取つてつけない挨拶をされた先  
刻の今なり、來客の目覺しさ、それにもこれにも、  
氣臆れがして、思はず花壇の前に立留まると、項か  
ら爪さきまで、木の葉も遮らず赫として日光が射し  
た。

才子は正面に、鴨川は横目に、貴なる令嬢を振返  
つて、一齊に此方を見向いた時、お夏は會釋も仕後  
れて、疊んだ手巾を搔撮んで前髪の處に翳したので  
ある。

應とでも言葉がかゝれば、取絶る法もあるけれど  
も、對手方は其なり口も利かなかつた咄嗟の間、お  
夏は船納涼の轉寢にもつひぞ覺えぬ、冷たさを身に  
感じて、人心地もなく小刻につか／＼と踵を返した。

鳳仙花の咲いた處でぬつと出て來たのは玄關番、

洗晒した筒袖の浴衣に、白地棒縞の袴を穿いた、見  
知越の書生で、（やあ、貴女でありますか、勝手に  
居た女中が女の明巢覗が入ったつていふですから  
な。はゝはは、何を寐惚けをつて。さあ、お通りな  
さいまし、馬鹿な、）と氣抜きのした様子。

（はい、御門の處に馬車が居て恐うございました  
から間違へて此方へ参りました、何うも失禮。）

（いや、飛んだ不都合でありました、ずっとおい  
でなさい。丁ど御來客で先生は其處のお座敷に在ら  
つしやいます。）と此者だけは調子が可い。

（憚様ですが一寸然うおつしやつて下さいましな、  
又お客様で御邪魔だと惡うございます。）

（何、山河内様のお姫様で、同じお弟子なんであ  
りますから構ひません、入らつしやい。）といひ  
棄てゝ、此の暑いに袴を穿かせるほどな家風、一體  
婦人を對手の業體、歌所はしつけのいゝもので、二  
ヤリともせず眞面目くさり、髭のない男の手持なげ  
に、見事な面皔を爪探りながら、勝手の方に引込ん  
で了つた。

お夏は歸るにも歸られず、折角の取次にも向うから遠慮されて、太く便を失つたが、暑さは暑し弱い身の、日向に立つて居られる數ではないから、止むことを得ず、思ひ切つて氣の進まないのを元の處へ引返すと、我にもあらずおづ／＼して、差俯向いて、姫と、師と、其夫人とおはす縁側へ行つて、兩手を ついたが、天窓から叱りつけでもされるやうに、お夏は消入る思がした。

お夏はやう／＼座に着いたが、鴨川が澄して見も  
せぬ目よりも、才子がつんとして居る胸よりも、山  
河内の姫様といふのが、膝に置いた手の寶玉入の  
指輪よりも、眞先に氣が着いたのは、大人が机の傍  
に差置かれたる、水引のかゝつた進物の包であつた。

今こそ人形町の裏通に母親と自分と二人ぐらし、  
柳屋といふ小さな繪草紙屋をして居るけれども、父  
が存生の頃は、隅田川を前に控へ、洲崎の海を後に  
抱き、富士筑波を右左に眺め、池に土塀を繞らして、  
石垣高く積累ねた、五ツの屋の棟、三ツの藏、いろ  
は四十七の納屋を構へ、番頭小僧、召使、三十有餘  
人を一家に籠て、信州、飛騨、越後路、甲州筋、諸  
國の深山幽谷の鬼を驚かし、魔を脅かして、谷川へ  
伐出す杉檜松柏を八方より積込ませ、漕入れさせ、  
納屋にも池にも貯ふること亂杭逆茂木を打つたる如  
く、要害堅固に礎を立てた一城の主人といつても可  
い、深川木場の材木問屋、勝山重助の一粒種。汗の  
ある手は當てない秘藏で、芽の出づる頃より、ふた

葉の頃より、枝を撓めず、振は直さず、我儘をさして甘やかした、千代田の巽に生抜きの氣象もの。

随分派手を盡したのであるから、以前に較べて此頃の不如意に、仕たくても出来ない師家への義理、紫の風呂敷包の中には、唯清書と詠草の綴じたのが入つて居るばかりの仕誼、わけを知つて居るだけに、ひがみもあれば氣が怯けるのに、目の前に異彩を放つ山河内の姫が馬車に積んで来た一件物、お夏は一肩身が狭くなるのであつた。

然れば氣の挫けた聲も弱く、

（お暑うございます、）と手をついて挨拶して、ものもいつてくれぬ師匠夫婦が氣色のほどを伺ふと、螢の崇りがあるのでないから、因縁事でもあるまいけれども、才子は爾時も手にして居た深草形の團扇を膝の眞中あたりで、じつと凝視めて黙つて居たが、顔を上げると、何と思つたか、半白といふ上目づかひに、お夏の面をじろりと見て、

（あゝ、暑うございますこと、勝山さんあなたお客様を煽いで下さい、私は一寸彼方へ参りますか

ら、）と疊へ團扇を、迂らして、お夏の身近う突いて寄越し、（失禮を、）と姫にいつて、其まふいと座を立つた。

お夏は聞正すまでもなく、疑ふまでもない、明かに、丁ど自分が居る背後から煽ぎ參らせよ、といはれたのである。

それ、頼まるれば越後から米搗にさへ出て来る位、分けて師の内室が仰せであるのに、お夏は顔の色を變へてためらつた。

（然うだ、勝山さん煽いでお上げ、）とお夏が直に命を奉ぜぬのを、歌詠の大人は寛仁 大度、柔かに教へるが如く仰せられる。

其でも黙つて俯向いて居た。

鴨川は又優しい聲して、

（分りませんか、あのね、今才が然ういつたのはね、彼方に用があつて行くから、あなた、其處にありません其の團扇で、お客様を煽いで下さいと言つたんです。）

(はい。)

(分りませんか、あのね、今才が然ういつたのは  
ね、彼方に用があつて行くから、あなた、其處にあ  
ります其の團扇で、)

お夏は堪らず團扇を持つて、  
姫が羅の袂を煽いだ  
のであつた。

十七

「先生、惜いことをしました、同一杯回生剤を頂かして下さるのなら、先方へ参りません前に、恚うやつて、」

と麥酒の硝子杯を一呼吸に引いて、威勢よく卓子の上に置いた、愛吉は汚れた浴衣の腕まくりで、遠山金之助と、廣小路の麥酒ホールの一方を領して居る。

「五六杯引掛けて置きや、半分は酒が手傳つて暴れてくれます、何しろしらふなんで、」といひかけて、迫つた眉根を寄せたのである。

金之助は腰をかけたまゝ、兩手で椅子を壓へて卓子に胸を附着けて、

「大向うが喝采でない迄も謹んで演劇をする分にはあ仕損ないが少ないさ、酔つぱらつて出懸けて見なさい、他の酔つぱらひと酔つぱらひが違ふんだよ。愛吉さん、お前が酒と連立つたんぢや、向上から鴨川で對手になつてくれやしない、序幕に出した強談

場だし、若干金が此方から持込といふのだから、役不足だつたらう、まあ飲むが可い、」  
と笑つて居る。

「何ういたしまして相濟ません、私ね、先生、書生や車夫なんぞが居るてますから、搦出す位なことはするだらうと思つてね、而したら一番撲倒して置いて、其奴を機に消えようと思つたんだが、まるで足腰が立たねえんです。未だね先生、そりや可うございますが、彼奴等人を狂人にしやあがつてさ、寄付やしませんでした、男ごかしだの、立ごかしだのは幾らもあるんだけど、狂人ごかしは私あはじめてなんで、躍るやうな手つきで引上げて参りましたがね、えゝ、お羽織はお返し申す。」

愛吉は胸紐を巻込んで、懐に小さく疊んで持つて来た、來歴のある彼の五ツ紋を取り出して、卓子の上なる蘇鐵の鉢物の蔭に載せた、電燈の光は其の葉を透して、涼しげに麥酒の硝子に映るのである。

「ですが先生、下司は下司で、此羽織を着た窮屈

さつたらありませんでしたぜ、私思ひますが、此の上こに袴はかまでも穿はいた日ひにや、斷たつて獄舎ごくやの苦くるみでさ。」

「其それでもよくお前まへごまかしたな。」

「先方さきぢやあ思おももつかなかつたからでせう、彼あのお夏なつさんに、こんな友達ともたちがあると思おもつた日ひにや、狒ひ々に人間にんげんの情婦いろが出來できるとあきらめなけりやなりません、へい、希代きたいなもんです。」と又また煽あふる。

「澤山たくさんおあがり、何どうだね。」

「濟すみません、何どうも五千疋御散財びきごさんざいをかけました上うへに御羽織おはおりを拝借はいしやく、其上そのうへ御馳走ごちそうでございます。眞個ほんたうに先生せんせいは、金主きんしゆと作者さくしやと、衣裳方いしやうがたと、振りつけと、御見物ごけんぶつとかねて下くださるんだ、本雨ほんあめの立廻りたちまはか、せめてのことに疵きずでもつけるんでなくつちやあ御贖身ごひいき効がひが無なえんですが、山やまが小せえんだね、愛宕あたごの石段いしだんを上のぼるほどもないんですからね、」

「だつて、一寸ちよいとでも煽あふがせて來たら可いいだらう、

仕返しは其だけで十分さ、私も勝山といふ其婦の様  
子を聞いて嘸ぞ心外だつたらうと思つたから。一體  
風のよくない御公家でな、しみつたれに取りたがる  
評判の對手だから、ついお前の話に乗つてお茶番を  
仕組んで上げたやうなものゝ、之が道理から言つて  
見なさい、師匠と親は無理な者と思へと、世間ぢや  
あいふんだよ。弟子にお客を煽がした位、手近な物  
を取つてくれも同然さ。癩に障つたの、口惜いのと、  
怪しからん心得違だと、却つてお前さん達の方を言  
ひ落さなけりやならない譯だよ。」

「へい、大きに然やうでございます。」と愛吉  
の神妙さ。

「はゝはゝ、眞面目になるな、眞面目になるな、ぐツと又一杯景氣をつけて、さあ、此方々樂屋内となつて考へると面白い、馬鹿に氣に入つた、痛快といふことだ。」

金之助は色氣のないニをし、垢抜けのした目のふちに色を染め、呼吸をフツと向うへ吹いて、兩手で額を支へたが、

「可い、可い、あゝ溜飲の下る話だ、五千疋の顔を見りや、知事公の令嬢で歌所の奥方が、床屋の役介者——まあ然うして置けよ——役介者を煽がうといふ當世に、お世辞をいつて紅白の縮緬でも拝領しようといふ氣はなしに、師匠が華族様を煽がせたといつて、やけに腹を立てた柳屋のも難有い。人事とは思はないで、其を又親の敵ほどに癢に障らしたお前も私あ嬉しい。理屈はなしにとぼけて居て、飛んだ可いが、いや、大人氣もなく其の尻馬に乗つて、利のつく金を若干と痛んだ、此の遠山先生も悪くはあるまい、」と金之助は獨りで莞爾々々。

「話せらあ、話せらあ、此奴あ話せらあ。無暗に飲めます。」と愛吉はがぶり／＼、狼と熊とが親類になつたやうな有様で。

「理屈はないとおつしやいますがね、先生、時と場合と代物に因るんですよ。何も口の端を折られるばかりが口惜いといふんぢやありません、時に因りますとね、蚊が一疋留まつたのが虻に食はれたよりに辛うございます。私あね、親孝行な奴が感心だといふんぢやあねえんで、へい、不孝な奴でも豪といひます。へい、盗人だつて氣に入るのがあるし、施をする奴に撲倒してやりたいのがありますね。不動様は鼻肩ですが、念佛は大嫌。水ごりを取つて其が主人のためなんだと聞いたつて、びくともしやあしねえんで、お三どんが靴を切らしたつて其が不便といふんぢやありません、そんなのははじめツから其氣でつき合つて居るんですからね、甘いことをいふと附上りまさ、癖になりますからね、煮酢をぶツかけときやあ可いんです、べらぼうめ、へツ、」  
といつて、顔を顰め、

「無法なことをいふと吃逆を出させるぞ。へッ、不可え、へッ、いや何うしやがつた、へッ、何のこッたい、へッ驚きましたな。先生、其、其ですがお夏さんの團扇ぢやあ恐しく瞻が煮えました、理屈はねえんです、いえ、理屈がねえんぢやあございませんや、けれども其の理屈は分りません。へッ、おい後生だ、へッ、何のこツた。」

愛吉にはぐツたりと首を低れて、ふらりとして居たが、

「お待ち下さい、待つておくんないまし。え、と、先生、恚うです。何だつて其の、彼の毛唐人奴等、勝山のお嬢さん、今ぢやあ柳屋の姉さんだ、其でも柳橋葎町あたりで、今の田圃の源之助だの、前の田之助に肖て居るのさへ、何の不足があるか、お夏さんが通るのを見ると、大騒動をやりますぜ。柳屋のお夏さんとはいはないで、お夏さんの柳屋、お夏さんの柳屋ツて、花がるたを買ひに来まさ。何だ畜生、上野の下あたりに潜つてやあがつて、歌讀も凄まじい、絲瓜とも思ふんぢやあねえ。茄子を食つてる蟋蟀 野郎の癖に、百文なみに扱ひやあがつて、

お姫様ひいさまを煽あふげ、べらぼうめ。あの、先生せんせい、此處こゝなん  
ですがね、理屈りくつは私わたしあ分わかつてます、お夏なつさんは、う  
まれつき團扇うちはツてものは人ひとを煽あふぐものだツてことは  
か、い、き、し、知しつちやあ居ゐないんです。」

「うむ、先まづ。」

愛吉は思はず又吃逆をして、

「へッ、いや怨敵退散。眞面目な所へ吃逆は情ない。然うぢやあございませんか、深川の家に住なすつた時なぞ、團扇を持つて、自分を煽いだ事だつて滅多には無かつたでせう。私あ上りまして見ましたかね、お夏さんが行水を使つて、立膝で恚う浴衣の袖で襟を拭いてると、女中がね、背後で団扇車つて奴をくる／＼とやつてました、洗髪だし、色は白し、

と酔眼をニつて苦い顔で、

「庭の植木からは雫が溢れます、袂だの、裾だの、其風でそよ／＼して、ぞつとするやうな美しさ、眞個に深川中の涼しいのを一人で引受けて居なさるやうで、見る者も悪汗が引込んだんです。

幾ら相場が狂つたつて、日本橋から馬車に乗つて、上野を歩で、道端の井戸で身體を洗つて、蟋蟀の巢へ入つてさ、山出しにけんつくを喰つて、不景氣な。此の温氣に何と、薄いものにしる襦袢と合して三枚

も襲ねて居る、茹つた阿魔女を煽がせられようとは思やしません、私はじめ夢の様でさ、胸氣ぢやアありませんか。」

「可いや、まあそんなに怒るな、傍に居る者が怯氣々々する。」

「御免なさいまし。つい、」  
「といつて愛吉は苦笑した。」

金之助は稍更り、

「何しろ以前は大した榮耀をしたものらしい。」  
と自ら語り頷いて且つ愛吉の面を見た。

「ぢやあお前は先からの知己か、紋床に居て近所だから繪草紙屋と懇意になつたといふんぢやあないのかね。」

関係の如何を怪んで其とはなく尋ねたのが、愛吉に直ぐ讀めて、

「をかしうございませう、先生、檜舞臺の立女形と私等見たやうな涼み芝居の三下が知己ツてのも

凄じいんですが、失禮御免で、まあ横ずわりになつてもなつて、口を利くには仔細がなくツちやあなりませんとも。」

「成程、ありさうな仔細だよ。先飲んで、ふむ。」

「過年、水天宮様の縁日の晩でしたつけ、大通のごつた返す處を些とばかり横町へ遠のいて明治座へ行かうといふ麵麩屋の物置の前に、常店で今でも出て居まさ、盲目の女の三味線を弾くのがあります。投銭にはちやちやら、かちやんなんて古風な流行唄をやつてますが、可い聲で、ぞつとするやうな明烏をやりますんでね。私あ例のへゞれけで、素見数の子か何か、鼻唄で、錢のねえふてくされ。おう、勤する身のまゝならぬテツテチン／＼／＼リンリン

——いつぞや主の居續に寝衣のまゝに引寄せて——を聞かしねえ、後生だ。恚うお客にすりや御損が行く、情人にして不足のねえからつけつ曾我の十郎てえお兄いさんだ、頼むぜ、と取巻いた人立を割つて怒鳴り込んだんでさ。ひよる／＼しながら先生、——といつて、愛吉は椅子に懸りながら身悶

をして見せた、金之助はやけに顔を撫で、

「悪くない、うむ、然うすると、」

「何時も交返すんだから盲目め、聲を知つてまさ、  
豫てお氣にやあ入らなかつたと見えて、

（あゝ、弾くがね、お鳥目をおくれ。）

（何を！）

（私の新内はばら、錢ぢやあ聞かせないんだよ。）  
ツて言ひましたぜ、先生、御存じぢやありません

か、年増で縁日を稼ぐ癖に、好い女でさ。」

こゝに愛吉が金之助に話したことは、丁ど二年前、  
一昨年きととしの晩春ばんしゆんの事ことで。

愛吉あいきちは今いまに到いたつてもおとなしくない、爾時そのじぶん分ぶんもおとなしくなかつたが、恐おそらく何時いつまでもおとなしくないのであらう。

いふが如ごとく、縁日えんにち稼かせの門附かどつけも利きかない氣きで、へゞれけの愛吉あいきちが意いにさからひ、價あたひを拂はらはなければ術わざは見みせぬ、お錢あしがなくつて居ゐて、其それで斷たつて凄すこい處ところを聞ききたいなら、前さきに立たつて提灯ちやうちんは持もたずとも、月夜つきよに背後うしろからついて來きて、お花主とくいの門かどでやる處ところを、こぼれ聞ききに聞きいたら可いいと、愛嬌あいけうの無ないことを謂いつたさうな。

二振ふたぶりの斧きのと、一挺ちやうの剃刀かみそり、得物えものこそ違ちがへ、氣象きしやうは同一おんなじ、黒旋風こくせんふう紋床もんどこの愛吉あいきち。酒きちがいみづは過すこして居ゐる、懷ふところにはふてゝ居ゐる。殊ことに人立ひとたちの中なかのこと、凹へこまされた面つらは握拳にぎりこぶしへ凸なになつて顯あらははれ、支さふる者ものを三方ほうへ振ふり飛ばとして、正面せめから門附かどつけの胸むねを掴つかんだ。紋床もんどこの若わかいのが酔よつたといへば、交番かうばんでも棄すてゝ置おくは、店みせの

邪魔はせず、往來には突懸らず、ひよろついた揚句が大道へ筋違に寝て、捨鐘を打てば起きて行くまで、當障りはないからであつたに、其夜は何と間違つたか、門附の天窓は束髪のまま、碎けて取れよう、二呀と傍の者。

(あれ！)

(畜生さあ、鳴かねえ驚なら殺して附焼だ。)

と愛吉はちらつく眼、二三度撲りはづして、獨で蹠跟げざまに又揮上げた。

握拳を確乎掴んで、力任せに後へ引放した者があ

(顔を見る、)

(や、)

(蒼くなれ、奴、居酒屋のしたみを舐めやあがつて何だ其の赤い顔は贅澤だい、我が注連繩を張つた町内、汝のやうな子子は湧かない筈だ、何處の流尻から紛れ込みやあがつた。 ) と頭ごかし、前後に同一やうな、袷三尺帯の若衆は大勢居たが、大將軍のやうな顔色で叱つたのは、鯨の傳六といつて、

ぬらくらの親方株、月々の三十一日には晝間から寄席を仕切つて總復習を催す、素人義太夫の切前を語らうといふ漢であつた。

過日其の復習の時、諸事周旋顔に傳六木戸へ大胡坐を搔込んで居て、通り懸つた紋床を、おう、と呼留め、つい忙しくつて身が抜けねえ、切前にやあ高座へ上るのだから、一寸道具を持つて来て髻だけあつて呉んなよ、と言種が横柄な上、豫て賣れた構の顔色を癢に障らして居た、稻荷さんの紋三、人を馬鹿にすな、内に晝寝をしてる處へ、意休が髯を持込んだつて氣に向かなけりやお斷り申すんだぜ、憚んながら此の稻荷はな、寄席へ出開帳はしねえんだ、あばよ、一昨日来い、とフイと通過ぎたことがあるから、坊主が憎けりや袈裟までの筆法で、同一内の愛吉にも含んだ意味があるらしかつた。

（放せ、やい、愛の手ツ首は細いつてよ、女の子が加減をして握るぜえ、此の鯨め。）といきなり取られた手を振切つて、愛吉は下駄を脱いで飛蒐つた、勢に恐れて傳六はたじ／＼と退つたが、附いて

居<sup>ゐ</sup>た若<sup>わか</sup>い衆<sup>しゆ</sup>がむら／＼と押<sup>お</sup>取り包<sup>つ</sup>んで、胴<sup>どう</sup>上<sup>あ</sup>げにし  
て抛<sup>は</sup>り出<sup>だ</sup>した。

愛<sup>あい</sup>吉<sup>きち</sup>は足<sup>あし</sup>も立<sup>た</sup>たず、腰<sup>こし</sup>も立<sup>た</sup>たず、のめツて居<sup>ゐ</sup>るの  
を、いや、踏<sup>ふ</sup>むやら、蹴<sup>け</sup>るやら。之<sup>これ</sup>を笑<sup>わら</sup>わずに尻<sup>しり</sup>を  
まくつた鯰<sup>なまづ</sup>の傳<sup>でん</sup>六<sup>む</sup>を眞<sup>ま</sup>先<sup>さき</sup>に、若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>の立<sup>た</sup>去<sup>ち</sup>つたあとで、  
口<sup>く</sup>惜<sup>やし</sup>い！ とばかりぶる／＼と顫<sup>ふる</sup>へて突<sup>つ</sup>立<sup>た</sup>つたが、  
愛<sup>あい</sup>吉<sup>きち</sup>は血<sup>ち</sup>だらけになつて居<sup>ゐ</sup>たのである。

築地明石町に山の井光起といつて、府下だ

第一流の國手がある。年紀は未だ壯いけれども、醫科大學の業を卒へると、直ぐ一年志願兵に出て軍隊附になつた、其の經驗のある上に、

第二病院の外科の醫員で、且つ自宅でも診察に應じて居る。

口寡で、深切で、さらりと物に拘らず、其で柔和で、品が打上り、唯見ると貴公子の風采あり、疾病に心細い患者は其だけでも懐しいのに、謂ふが如き人品。其に信州、能登、越後などから修業に出て來て、訛澤山で、お舌をなごいふ風ではない。光起の亡き父も、義庵と稱して聞えた典藥頭、今も残つて居る門内左手の方の柳の下なる、此邊に珍しい掘井戸の水は自然の神藥、大概の病は之を汲めばと謂ひ傳へて、折々は竹筒、瓶、徳利を持參で集るほどで。

先代の信用に常若先生の評判、午後からは病院に

通勤する朝の内だけは、内科と外科と然るべき助手  
を兩名使つて、猶ほ詰め懸ける患者を引受け切れ  
ず、外神田に地を選んで、住所の町名を其のまゝ、  
明石病院といふのを私立で當時建築中、此處で山の  
手の病家を喰留めようといふ勢。

山の井の家には薬局、受附など眞白な筒袖の上衣  
を絡つて、肅々と神の使であるが如く立働くのが七  
人居て、車夫が一人、女中が三人。但しまだ獨身で  
あるから、女は居ても何となく書生が寄合つたとい  
ふ遣放しな處があつて、悪く片附かない構の、秘さ  
ず明らさまなのが一際奥床しい。

記者遠山金之助は、愛吉から此の山の井の名を聞  
くと、一層、聞く話に身が入つた、蓋し豫て自分は  
醫學士と別懇であつた所為である。

さるほどに愛吉は鯰の傳六 一輩に突轉ばされて、  
身體五六ヶ所に擦疵、打たれ疵など、殊に斬られも  
破られもしないが、背中の疼痛が容易でない。

尤も怪我をした當夜は、足を引摺るやうにして密

と紋床へ這戻り、お懶情さんの親方が、内を明けて居ないのを勿怪の幸、お婆さんは就寝てなり、姐さんは優しいから、いたはつて呉れて焼酎を塗つて、上口あがりくちの火鉢ひばちの傍へ突臥して寝たが、さあ、難儀。

あくる日歸つて来た紋三郎には口惜くつても喧嘩のことは話されず、固より條理の立つた事ではない、酒の上の悪戯を懲らした方は、男が可いけれども、親方は身内のこと、邪が非でもきかない氣なり、豫て快からぬ對手が傳六と明しては唯濟むまい。引被つて達引でも、もし為た日には、荒いことに身顛ひをする姐さんに申譯のない仕誼だと、向後謹みます、相替らず酔つたゝめの怪我にして、只管恐入るばかり。

轉んだ身體を引摺つて歩行いても、此ほど疵がつく砂利は界限にない筈と、紋三内々は睨んだが、愛的可いほどにして措け、お前には母親があるぜ、と言つて深くは咎めず、大目に見てくれたのが附目な位。可哀さうに染むだらうねと、あねさんが又塗つてくれる焼酎を、何うぞ口の方へとも何ともいはな

い弱りさ加減、黒旋風の愛吉疼むこと一方ならず。

素人療治では覺束なくなると、恰も可紋床は、豫  
て山の井に縁故があつた。

先の義庵先生は、市に大隠を極めて濱町に住つた  
ので、若い奴等など言つて紋床へ割込んで、夕方  
から集る職人仕事師輩を凹ますのを面白がつて、  
至極の鐵拐、殊の外稻荷が鼻屑であつたので、若先  
生の髪も紋床が承る。

（何うです豪傑、蝦蟇の膏ぢやあ不可ませんか。）  
 と薬局に痛めつけられて、何時も蝦蟇の膏と酒さ  
 へありや外科も内科も譯なしだ、お前さん方は弱い  
 者苛めで儲けるんだ、などゝ大言を發する愛吉、中  
 指のさきで耳の上を搔きながら大恠げになつて其日  
 も又。

明石町へ通ふこと五日六日、最う佳からうといふ  
 日のことであつた。

打傾いたり、首垂れたり、溜息をしたり、咳いた  
 り、堅炭を埋けた大火鉢に崩折れて凭れたり、然う  
 かと思ふと欠伸をする、老若の患者、薬取が犇と詰  
 懸けて居る玄関を、へい、御免ねえ、で愛吉はつか  
 ノ、と。

恚る馴染でお出入といつたやうな怪我人であるか  
 ら、番號も遠慮もない、愛吉は四邊構はず、  
 （おう、柴田さん、此の、診察所、と黒塗の板に  
 胡粉で書いてある、此の札を何かしておくんなさい

な。横ツちよに曲つて懸つてるんですが、私あ過日中から氣になつてならないんで、直すか／＼と思つてると矢張り横ツちよだ。私の内は貧乏だけれど姐さんが居るから暖簾が汚れませんか、御新造が居なさらねえとそれだもの困つちまふ、と高慢なことをいひながら、背伸をして、西洋造の扉の上に、鷄卵色の壁にかゝつた塗板を眞直に懸直し、其まゝ閉つてる扉を開けて、小腰を屈めて診察所へ入つた。

密閉した暗室の前に椅子が五脚ばかり並んで、其へ掛けたのが一人、男が一人、向うの寢臺の上に胸を開けて仰向けになつて居る。若先生光起は、結城の袷に博多の帯、黒八丈の襟を襲ねて少し衿短に着た、上には絲織藍微塵の羽織平打の胸紐、上靴を引掛け、之に靴足袋を穿いて居るのは、蓋し宅診が濟むと直ちに洋服に變つて、手車で病院へ駆けつけようといふ早手廻。

卓子を傍に椅子に倚つて、一個の貴夫人と對向ひで居た。卓子に相對して、藥局の硝子窓を背後に、彼の白の上着を着たのと、いま一人洋服を着けた少

年と、處方帳をずばと左右に繰廣げ、筆に墨汁を含ませつゝ控へたり。

薬の薫は床に染み、窓を壓して、謂ふべからざる冷静の趣。神社佛閣の堂と名醫の室は、如何なる者にも神聖に感じられて、さすがの愛吉、此處へ入ると天窓が上らず、青菜に鹽。愛吉、薬の匂に悄れ返つて醫學士に目禮したが、一體八字髯のある近眼鏡を懸けた外科の助手に毎日世話になるのであつたら、愛吉は猶豫はず、ひよこ／＼と進むと、戸が半開になつて居たので、突然外科室へ首を突込んだが、驚いて退つた。

咄嗟の間、世にも媚かしい雪のやうな女の顔を見たのであつた、而して愛吉がお夏を見たのは、其が最初だといふのである。

見るから心も冷ゆるばかり、冷たさうな、艶のある護謨布を蔽ひかけた、小高い、凡そ人の脊丈ばかりな手術臺の上に、腰に絡つた紅の溢るゝばかりの膚を脱いだ後姿は、レエスの窓掛を透す日光にくつきりと、然も霞の中に描かれたものゝやう目に

留まつた。

愛吉の間の悪さ、思はず顔を赧らめながら、もぢ  
／＼後退になり、腰をかけて待合して居る、患者か、  
將た供のものか、圓鬚の婦人の次なる椅子に堅くな  
つたが、心こそ着かざりけれ、外科室に寄つた椅子  
の上に、之も又媚かしく差置いてあるのは、羽織と、  
帯と、解棄てた下じめと懐紙。取亂した藤お納戸、  
緋、桃色、水色、白、紅。

愛吉はきよとんとして、ぼんやりあらぬ方を眺めながら、目玉をくる／＼と遣つて居ると、廳で外科室の其の半開の扉をおした、洋服の手が引込む、と入違ひに、長襦袢の胸がちら／＼、薄紫の半襟、胸白く、裕の衣紋の亂れたまゝ、前褸を取つたがしどけなく据を引いて、白足袋の爪先、はらりと零るゝ留南木の薫。

診察室を出て来たが、深川の勝山、未だ世盛の頃で、お夏其の時は高島田の、年紀十七であつた。

(何某。) と彼の筆を持つた一人が聲を懸けると寝臺の上に仰向けになつて居たのは、迂り落ちるやうに下りて蹠踵と外科室へ入交る。

同時に醫學士に診察を受けて居た貴夫人は胸を掻合せたが、金縁の眼鏡をかけた顔で、背後へ芍薬が咲いたやうな微妙い氣勢に振返つた。

其の時、打合せの帯を両手に取つて、床に膝をつ

いてお夏の前に廻つたのは、先刻から控へて居た彼の圓鬚の婦人であつた。

お夏は衿を取つて揃へると、腰から乳の下に下じめを無造作にぐる／＼巻、あてがつてくれる帯をしめて、袖を上へ投げて肩にかけた。附添の婦人は衝と立つて背後へ廻る。

愛吉は心なく垣間見た人に顔を見らるゝやう、思ひなしか、附添の婦人の胸にも物ありげに取られるので、うつむいては天窓を掻いた。

其の帯を未だ結び果てなかつたほどのこと。光起は今貴夫人を診察し了して、立身になり、片手を卓子につきながら、低聲で何か命じて、學生に其の筆を運ばしめて居たが、一寸筆を留めて伺つた顔に頷いて見せて、光起は衝と立直つた時、不圖、帯をして居るお夏を見て、

( 濟みましたか。 )

( えゝゝ ) と頷く。

( 痛かつたでせう。 )

（はあ、）　と事もなげに、淡泊に答へたのである。

光起は微笑んで、

（貴女、母様のいふことを肯かないと又できますよ。）

お夏は襟を叩へるやうにして、差俯向いて、颯と顔を赧らめたが、何にもいはないで莞爾した。

愛吉は額を撫でた。

醫學士の言葉とお夏の素振を、附添は嬉しさうに、  
（お夏様、あれ御挨拶をなさいましな。」

（知らない、）　と素氣ないことをいつて再び莞爾。

（先生、癬の治ります薬はありませんでせうか。）  
と不意に言ひ出したのは件の貴夫人であった。

（打棄つてお置きなさい、）　と光起は言下に應ずる。

(でもあのこんなですから、) と然も世馴れた、  
人懐いといつたやうな調子で、光起に背を捻向  
けると、項を伸して黒縮緬の羽織の裏、紅なるを片  
落しに背筋の斜に見ゆるまで、抜衣紋に、亘らかし  
た、肌の色の蒼白いのが、殊に干からびて、眉を造  
つた、白粉の濃い、金縁の眼鏡に瞼の皺をかくした  
顔こそ若けれ、あらはに見ゆる筋骨は數四十である  
のに、彼を抱くものあらば正に其の者の手の下なる  
べき、左の背を肩へかけて、亞弗利加の地圖の如き  
一面の癬、あな笑止や。

(汚えな!) つて私あ本當にうつかり。其が何  
です、山河内といふ華族の奥方だつたんですつて、  
華族だつて汚えんですもの。と愛吉はビイヤホー  
ルで語りながら、今も思出すほどか眉を顰めたので  
ある。

二十四

名は知らず、西洋種の見事な草花を眞白な大鉢に  
 植ゑて飾つた蔭から遠く其の半ばが見える、圓形の  
 卓子を圍んで、同一黒扮装で洋刀の輝く年少な士官  
 の一群が飲んで居た。

此方に、千筋の單衣、小倉の帯、紺足袋を穿いた  
 禿頭の異様な小男が唯一人、大硝子杯五ツ六ツ前に  
 並べて落着拂つた姿。

時々鬚のない顔が集り合つては、哄といふ笑語の  
 聲が彼の士官の群から起る毎に、件の小男は一寸々々、  
 額を上げて其方を見返るのであるが、丁度背合せに  
 なつてるから、金之助に之は見えなかつた。

ビヤホールのは客は、今纔に三組の外には無かつ  
 たので、生麥酒の出入をする一段高い臺の上には、  
 器械を胸の邊にして受持のボオイが恰も議長席に着  
 いたものゝやうに正面を切つて身動もせず悠然と控  
 へて居る、其下に椅子に凭つて一人のボオイは新聞  
 を讀む、之と並んで肩から脇の下へ金袋をぶらさげ

ひとり、白の洋服の足を膝の處で組違へて、斜に肱  
で身體の中心を支へて立身で居る、屢々聲音を立て、  
しつくひ叩の土間を、靴で士官の群の處へ通ふのは  
此のボオイで、天井は高く四邊はひっそり、電燈は  
かり煌々と眞晝間の如く卓子を照して、椅子には人  
影もなかつたのである。

戸外は立迷ふ人の足、往來も何となく騒がしく、  
そよとの風も渡らぬのに、街頭に満ちた露店の灯は、  
をり／＼下さまに靡いて、すはや消えむとしては燃  
え出づる、其都度夜商人は愁はしげなる眉を仰向け  
に打見遣る、大空は雲低く、恰も漆で固めたやう。

蒼と赤と二包の鐵道馬車の灯は、流るゝ螢かとは  
かり、暗夜を貫いて東西より、衝と寄つては颯と分  
れ、且つ消え、且つ顯れ、輾轉として近き來り、殷々  
として遠ざかる、響の中に車夫の懸聲、蒸氣の笛、  
殆ど名状すべからざる、都門一場の光景は一重の硝  
子に隔てられてビイヤホルの内は物色沈々、さす  
がに何となく穩かならぬ宇宙の氣勢の、屋を壓して  
刻々に迫るを覺ゆる、是が、風になるか、雨になる

か、日和癖で星になるか、いづれとも極つたら、瀬を造つて客は一齊に込むのであらう。

とばかりにしてもものゝ静けさよ。此處彼處の鉢植なる熱帯地方の植物は、奇花を着け、異香を放ち、且つ緑翠を滴らせて、個々電燈の光を受け、一目眇として、人少なに、三組の客も、三人のボオイも、正に之れ沙漠の中なる月の樹蔭に憩へる風情。

此間に、愛吉がお夏の來歴を説く一場の物語は、人交もせず進んで、築地明石町の醫學士の診察所に於ける出來事にまで至つたのである。

「聲を出して言つたのか、汚えなんて、癖を嘗めさせられはしまいし、肌を脱いで醫者に見せた處を背後から、汚え、なんていふ奴がありますかい、然も華族だつてな、山河内 伯爵だ。」

尤も其の奥様は赤十字だの、教育會、慈善事業、音樂會などいふものに取合つて、運動をするのに辻車で押廻すといふ名代のかはりものなんだけれども、怒つたらう、皆驚いたらう、亂暴狼藉だ、何うした、それから、

「私もついうつかり遣つちやつたんで、はつと思ふと、」

「うむ、」

「丁度代診さんの方へ呼ばれたから遁げ込みました。」

「しかし癬が汚えといったのが、柳屋の氣に入つたといふでもなからう。」

愛は眞面目に、

「へい、然ういふ譯でもないんですがね。」

「それぢやあ手術臺に肌脱の、俗にそれあられもないといふ處を見られたのが御縁になつたか、但し些と何うもをかしいな。」

「何、然ういふわけでもないんですがね。」

「何しろ、汝の方からゆすり込んだものと私は思ふな。」

「先生御串戯を、勿論彼です、お夏さんは華族でえと大嫌です。私が心も同一だ、癬は汚えに違ひません、ですが、其が何うといふことはありませんよ。それからね、素肌を氣にして腋の下をすぼめるやうな筋のゆるんでる娘さんぢやありませんや。けれども私が出入をするやうになつたのは、此方から泣附いたんです、へい。」

「手を合せて、拝みます、と口説いたか。」

「何ういたし、手前御慮外は申しませ

ん、泣ついたのは母様でさ。」

「はゝあ、紋三郎がいつたやうに、何時も酒の方  
の意見の義だらう。」

「否、其時は生命にかゝはります一件。」

「おや、お前それでも酒の他にかゝはることがあ  
るだらうか。」

「大有り、」といつて愛吉は硝子杯の縁を壓へ  
ながら、金之助をぢつと見て、

「串戯ぢやありませんでしたよ、眞個。」

「其がね、矢張其日なんです、事といふと妙なもん  
で、何でもない時は東京中押廻したつて、蜻蛉一  
疋ぶつかりこはねえんですが、幕があくと一齊で  
さ。」

「大層感じたな。」

「眞個ですから。」

「ぢやあ何か、華族様へ御無禮を申したとあつて、  
お差紙でも着いたのかい。」

「否、先刻も申しました通り、外科室の方へ呼ばれたんで、先づお座は濁りましたね。」

それからお手當が濟みました、最う通つて來ないでも大丈夫だ、あとは唯大人しくなさいよ、さ、大人しくしろが可うございませう。

無暗とお禮を謂つて匆々に山の井さんの前を抜けて、玄關へ参りますとね、入る時にやあ氣がつきませんでしたが、此處に其のまた珍事出來の卵が居たんです。女の子で、」

「いづれ然うだらう。」

と金之助は故とらしく深く頷く。

「まあ、お聞きなさいまし。上口の突尖の處、隅の方に、ばさ／＼した銀杏返、前髪が膝に押つくやうに俯向いて、疊に手をついて恚う、横ずわりになつて、折曲げて居る小さな足の踵から甲へかけて、ぎり／＼繻帯をして居ました、綿銘仙の垢じみた袷に、緋勝な唐縮緬と黒の打合せの帯、此奴を後生大事にしめて、」

「大分委しいぢやないか。」

「私だつて先生、唐縮緬と縺子位は知つてます

ぜ。」

「幾干か出せ、こりや恐しい。」

「眞平御免なさい、先方は小兒なんです。極内氣さうな、半襟の新しいが目立つほど、しみつたれた哀な服装、高慢に櫛をさしてるのがみじめでね、何う見ても女中なんですが。」

「恐ろしく疼むかして、小さく堅くなつて、しく／＼泣いてるんです。」

「姉さん何うしたんだツてね、餘り可哀相だから聲を懸けて遣りましたが、返事をしません。疵處にはかり氣を取られて、最う現なんだらうと思ひました、少いの疼々しい。」

「じれつたいから突然肩に手を懸けると、其の女中は苦しうツてか、袷も透すやうな汗びつしより、ふる／＼震へて居るんでせう。

何うしたんだつて開きますとね、足の裏から突通るほどの踏抜をしたんださうで、其の前の日の事だつていふんです。

見りや込合つて居ましたけれど、どれも病人、人の世話を焼かうといふ元氣の好い奴は居りませんや、此奴かゝり合だ、身體を抜くわけにやいかねえやうな氣になりました。

一體何處の者だ、家は遠いかつて聞きますとね、つい五町ばかり先でございます、あの、親分の處に、と弱つた聲でいひました。親方といふのは鯨の傳——何うです騷の卵ぢやありませんか、尋常事ぢやアありますまい。

何でも傳が内の奉公人に違えねえ。野郎め、親方々々と間違でも人に謂はれる奴が、汝が使つてる者がこんな怪我をしてるのに、醫者に超越すつて、

ない、病の猫を開放したやうな工合は何たる處置だ  
い、姐さんをつけて寄越さないまでも、腕車といふ  
ものがないのぢやあなからう、可哀相に丸ぼちやの  
色の白いのが、今の間にげつそり瘦せて、目のふち  
を眞蒼にして居らあ、震へてるぜ。

然う思つて堪らなかつたんですが、氣が着きます  
とね、待てよ、私が思つた通を口へ出して謂やあ、  
突然傳を向うへまはして、ずらりと並べる臺辭にな  
る、さあ、おもしろい、素敵妙だ。

一番、此の女をかつぎ込んで、奴が平生侠客ぶる  
のを附目にして、ぎうと謂はさう。

蝦蟇の膏で凹まされるのも何のためだ、忘れやし  
ねえ。」

と話をするにも凄まじい意氣込だつた、愛吉は一  
寸氣をかへ、

「へゝゝゝ、先の縁日の晩のは、全く此方が悪か  
つたんでさ。落度はあつたつて口惜いにや口惜いで  
せう、先生、子曰はよして聞いて下さい、可う  
ございますか。」

「可いさ、可いさ。」

「オイ、姉や、私が肩へつかまりねえ、わけなしだ。お前ン處まで送つてやらうと、穿物を突懸けて置いて、蹲んで背中を向けますとね、そんな中でも極のわるさうに淋しい顔をして、うじ／＼。」

じれつてえ女ぢやあねえか、尻なんざあ抱きやしねえや、帯を持つて背負つてやら、さあ来い、と喧嘩づらの深切づくめ。言ぐさが荒つぼうございますから、おど／＼して、何と肩へ喰ひつくやうに顔をかくして、白晝、其でも此の野郎の背中へ負をしましたぜ。あとで考へると氣の毒でさ、女の氣ぢやあ疵が痛む方がどんなにお恰好だか知れませんよ。

全く叱りつけるやうに勧めたんですからね、すゝめ人が私でせう。阿魔は的切、ぶんなぐられると思つて負さつたもんです、名はお米ツていひます、可愛い女なんですがね、十七でしたよ。

さあ、歩行き出すと、恚う耳朶の處へ纏れた髪の毛が障るでせう、あいつあ一筋でもうるさうがさ、首を振ると猶亂れて絡ひますから、呼吸をかけてふ

ツノ、鬢びんの尖さきを向むうへ吹ふいちやあ、三角みつかどの處ところまで參まゐりますとね、背後うしろから腕車くるまが來きました。

町幅まちばが狭せまいんですから、すれ違ちがつて前まへへ駆かけ抜ぬけ  
たと思おもふと、振返ふりかへつた若わかい衆しと一しよ所に、腕車くるまの上うへか  
ら見みなすつたのは先刻さつきのお嬢様ぢやうさま、え、お夏なつさん。」

「藤お納戸の、彼の脱いであつた羽織を被ておいでなすつた。襦袢の袖口に搦んだ白い手で、母衣の軸に掴まつて、背中を浮かすやうにして乗つてましたつけ、振向いて私がお米を負つてた形を見て莞爾笑ひなすつた。

顔を見合せますとね、此方でも何だか知己のやうな氣がしたもんですから、遠慮しねえで、（今日は、）と肚の中で言つてお辭儀をしたんです。

腕車は何、休んだんぢやあございませぬ、駆ける中、一寸の間なんで、其まゝ飛ぶやうに行つちまひましたが、縁でございませう、先生。

世の中といふものは、何處にどんな引かゝりがあるか知れませぬ。何故ツてますと、あとで分りましたが、其のお夏さんの勝山といふ家は、私の亡くなりました父爺が、船頭で、奉公人同様に久しい間御恩になつたのでございました。

さあ、其から米坊をかつぎ込んで、丁ど縁端に大胡坐をかいて毛抜をいぢくつてやあがつた、鯰の傳をふんづかまへて、思ふ状毒毒づいたとお思ひなさいよ。

くだらないことをお耳に入れるでもありませんから、始末は申上げませんが、何しろ侠客だとか何とかいはれる分では、お米に届かねえ點が十分にあつたんですから、こりや力づく、腕づくぢやあ不可ませんや、傳の親仁大凹み。

此方あくツと溜飲が下つて、おさらばを極めてフイとなつて、ざつぷり朝湯を浴ひた氣さ、我ながら男振を上げて、や、どんなもんだい。

人形町 居廻から築地邊、居酒屋、煮染屋の出入、往復、風を拂つて伸しましたわ、すると大變。

暗がりを脚へ楊枝、月夜には懷手で、暢氣に歩いてると、思ひがけねえ狂犬めが噛附くやうな鹽梅に、突然、突當る奴がある、引摺倒す奴がある、拳固でくらはす奴がある、一度々々呼吸を引かないばツかりで、はツノ、と思ふことが、毎晩ぢやアありませんか。」

「成程、」

「其の度に微傷です、一年三百六十五日、此の工合ぢやあ三百六十五日目に、三百六十五だけ傷がついて、此の世を宜しく申させられさうで、私も、うんざり。」

様子を聞くと、傳が此事を意趣にして、子分子方の奴等が初中ニけ廻すんださうですから、私あ堪らなくなつて、舟賃を一錢出して、川尻を渡つて佃島へ遁げました。

佃島には先生、不孝者を持つて多いこと苦勞をする婆さんが一人ね、辨天様の傍に吝な掛茶屋を出して細々と暮して居ます、子に肖ない恐しい堅氣なんで。」

「何だい、其は、」

「私の母親でございます。」

「其だもの。」

「へへへへ、今更いたし方がありません、其處へ

轉がり込んで、居縮まつて震へてたもんですから、  
愛吉何うしたんだつて、母親が尋ねます。

これ／＼だといひますとね、其だから常日頃いつ  
て聞かさないことではない。蟻ぢやあなし、毛蟲ぢ  
やあなし、水があつたつて對手は渡つて來ます。し  
かし  
鯨の傳  
其ならば死んだ父

爺が御恩になつた深川の勝山さんへ出入をするから、  
彼家へ行つて、旦那様にお頼み申して、傳にいひ聞  
かしておもらひ申して、お前の身體を無事なやう計  
らひませうと、父爺が亡くなつてからも暑さ寒さに  
やあお見舞を缺かしたことがないといふ、律義はこ  
んな時用に立ちます、で母親が取りあへず。」

「深川へ参りましてね、母親が譯を謂つて話をしますと、堅氣の商人だ、遊人なんぞ對手にして口を利けるんぢやあないけれども、傳か、可し、鯰ならば仔細はないと、さらりと埒は明いたんです。

私はこんなやくざものゝ事ですから、母親も別に話さないで居たのが其時知れまして、然うか、そんな倅があるのか、床屋が家業と聞きや丁ど可い、奉公人も大勢居るこつた、遊ひながら働きに寄越すが可いと、深切におつしやつて下すつたので、二度目にはお禮かた／＼、母親について伺ひますと、先生、吃驚しましたぜ。

中庭で以てきやつ／＼といふ騒ぎ、女中衆が三四人、池の周圍を駈けてるんで、鬼ごっこがはじまつてるか、深川だつて暢気なもんだと、ひよいと見ると何うです、縁側に腰をかけてたのは山の井の診察所で見たと、別嬪だらうぢやありませんか。

而して女中が遁げるのを追懸けまはすのは、恐い、

犬でも蹴さうな軍鶏なんで。

今でも柳屋に飼つてあります。強いことツたら御用の小僧なんか背後からはたかれて、ぎやつといつて、打つ坐りませ。

心持が可うございますぜ、とさかを立つてずつと伸して、眼をくるりと遣りますとね、私どもも取組みさうでせ。一體氣の勝つた、お夏さんは癩癩持なんだけれど、婦人だけに何うすることも出来ないんですから、癩なことは軍鶏と私とで引受けてるんで、えゝ、可うごす、軍鶏と愛吉とで請合ひましたと謂ふと、蒼くなつて怒つてる時でも莞爾しまさあ。

お夏さんは飛んだ其の鶏を可愛がつてます。それから母上はいふまでもありませんが、生命がけで大事にして居るお雛様がありますよ。

十軒店で近頃出来合の品物ぢやあないんださうで、由緒のあるのを、お夏さんのに金に飽かして買ったつて申しますがね、内裏様が一対、官女が七人お囃子が五人です、其についた、箆笥、長持、挟箱。御

よぐるまひと  
所車 一ツでも五十兩したツていひますが、皆 金  
まきゑ  
蒔繪で大したもんです。

此のお雛様の節句と来た日にや、演劇も花見も一  
しよ  
所にして、お夏さんにかゝる雑用、残らず持出すと  
いふ評判な祭をしたもんですツさ。

わつし  
私が勝山に伺ふやうになりました翌年、一昨年で  
すな。

三月 三日の晩、全焼にあひなすつた。 とい  
ひかけて、愛吉は四邊をニしたが、浮かぬ色をした。

聲も低く、

「然も私が行合せて居たんです。十時頃でござい  
ましたね、お雛様を見せおくんなさいつて、勝手  
の方から。不斷、皆様で可愛がつてくれますし、お  
夏さんも鼻肩にして下すつたもんだから、直に其の  
何でさ、二階の座敷へ上りました。

目の覚めるやうな六疊は、一面に櫻の造花。活花  
の桃と柳はいふまでもありませんや、燃立つやうな  
緋の毛氈を五壇にかけて、眩いばかりに飾つてあり  
ます、お雛様の様子なんざ、私にや分りません、言

つたつて、聞いたつて、唯最う綺麗で澤山。

お夏さんは直ぐ其の壇の下の處に雪洞を控へて、立派に着換へて居なすつたつけ。

彼の内裏様のだつて、別に二個蒔繪の蝶足の然うですな　！　」

愛吉は卓子の上に四角な線を指の先で引いた。

「此の位なお膳がありません、男雛のと女雛のと一對、そら、あの、」

金之助は熱心に耳を傾けながら頷いた。

「可うございますか、其の一對の小さなお膳を、お夏さんが自分の前に置いて、最う一個の方を向うへならべて、差向ひといふ形で居なすつたが、前には誰も見えなかつたんです。

指を丸げた様な蒔繪の椀、それから茶碗、小皿なぞ、皆其のお膳に相當したのに、種々な御馳走が装つてありましたつけ。

其の後病氣で亡くなりましたが、彼の診察所に附いて居た年増ね、乳母といふんぢやあ無かつたんですが、お夏さんのお氣に入で傍の處へ。最う二人、小間使が坐つて、此が白酒の瓶を持つてお酌をしてる、二ツ三ツ飲んなすつたが、目の縁をほんのりさせて、嬉しさうに、お雛様の飾りものを食べてる處で。

や、素敵なものだと、のはうづな大聲で、何か立派なのと其處らの艶麗さに押魂消ながら、男氣のない座敷だから、私だつて遠慮をしました。

いつものやうにお臺所へ下つてお末の出尻と一所に頂くべいとね、後退りに出ようとすると、愛吉さん一ツあげませうかと、お夏さんが言つたんです。まるで夢中、私あ腰が抜けたやうに突然其處へ坐りましたぜ。

さあ、一面の櫻と、咲亂れた桃の中、雪洞の灯で見た其の時の美しさ。

然も微酔と来て居ませう。最う雜壇を退けようと、いふ三日の晩、此間飾つてから起きると寝るまで附添つて、階下へも滅多にやあ下りたことのないばかり、樂み疲れに氣草臥といふ形で、片手を疊に置いて右の方に持つてなすつた小杯を、氣前よくつゝと差して呉んなすつたい。

震へながらー 眞個ですよ、震へながら其のお杯を受けようとすると、愛吉さん最う些と其方へと、傍から年増のが氣をつけたんです。

坐つたのは、お膳の前でせう、これは先生。毎々々々然うやつて差向ひに並べても、向うへ坐つた奴は未だ一人も無かつたんださうで。

お夏さんは朋友が嫌だつていふんです、又番頭や小僧が罷出ようといふ場ぢやありませんや。

然も其年、一昨年ですな、其晩にや私より一足前に、雞の間で一人お客があつたんです。

何でも天下に聞えた立派な豪傑な爺ださうですが、旦那とは謡の方で、築地の寶生の師匠の宅ね、彼能樂堂などで懇意になつてるんだつて謂ひましたよ。大層な雛だといふが、どれ／＼と押上がつて、やあ一人でやつて居なさるの、私が相手をしようつて、其のお膳の前に坐りましたつさ。

お爺ちゃん、厭なこつた！ とお夏さんが屹となつたので、傍の者はあツふ／＼、旦那も御新造様も顔色を變へなすつたけ。はゝあ、これは遣られたと、肥つた腹から大笑を揺り出して、爺さんは譯もなく座敷をかへ、階下で今、旦那、御新造様なぞと一座飲んで居ると謂ふ、其の後でせう。

だから年増は遠慮をしると氣を付けたんです。

するとお夏さんがね、可いよツて、言ひながら、白酒の瓶を取つて、お酌して酔はして遣らうや。莞

爾こりしてお前まへ様さん、否いさ、先せん生せい！  
「

金きん之の助すけは啞あ然ぜんとして、

「口くちの端はたを拭ふけ、泡あわだらけだ。  
「

愛吉は仇氣なく平手で唇を横に扱いたが、すがめて掌を打眺め、

「嘘、泡なんぞ附着いてやしねえ。」

と例の愛くるしい口を結んで眉根を寄せ、吐息を  
ついで歎息した。

「眞個に考へて見りや夢の様ですよ。」

お夏さんは酌をしておくんなさる氣で瓶を持ちながら、ふと雛の壇を見ましたがね、何うなすつたんだか、おや！ といつて恚う、瞳を据ゑて、瞬もしないで須臾。

枕についても目をぱつちり、お雛様の番をして、すや／＼と寐息に簪の花は動いても、飾つた雛は鼠一疋がたりともさせないんでございますつてね、過年もお雛様が皆で話をするツて、眞面目に言ひなすつたことがある位、凝つてるんだから魂が入つてませう。

ト其の凝視めて居なすつたツけ、一寸お雛子の人

形が笛を落した、まあ、鼓を打棄つた、まあ、まあ、まあ、太鼓の撥を、あれ緋の袴が動くんだよ。あれ、皆！とお夏さんがすつくり立った。

顔を見合せて皆呼吸を呑みましたわ。

其の様子ツたら、まるで雛がどつと惣立ちになつたやうに、私等が胸に響いたんです。」

語る時、十有数日の間を蒸しに蒸した、人類の汗を絞り抜いた、一昨日来の氣壓は、正に其の極所に達したと見えて、陰々たる中にものゝ響、柱がきしむやうである。

愛吉は肩をすぼめて、

「其の途端に私等は雛壇が滅茶に崩れるんだと思ひましたね、火事だ、火事だと、天井の邊で喚いたと思ふと、」

愛吉は穩かならぬ猿眼で、きよろ／＼と四邊を見ながら、忽ち衝と立上つた。

「先生、雨です。」といふ間もなく、硝子窓に

一千の礫ばら／＼と響き渡つて、此の建物の揺ぐかと、萬斛の雨は一注して、轟とばかりに降つて來た。

金之助も、話の變と、急な雨に、思はず顔の色を變へて唾を呑んだが、押出すやうに、

「おゝ、雨だ。」

臺の上のボオイは眞先に飛び下りた、新聞を見て居たのは眞中を掴み棄てゝ立つ。立つて居たのは金袋の口を壓へて、此の三人須臾の間といふものは唯縦横に土間の上を駆け歩いた。白い姿の慌しく行交ふのを、見る者の目には極めて無意味であるが、彼等は銘々に大雨を意識して四壁の窓を閉めようとあせるのである。大粒な雫は、又た實際、斜とも謂はず、直ともいはず、矢玉のやうに飛び込むので、彼の兀頭の小男は先刻から人知れず愛吉の話に聞惚れて、只管俯向いて額をおさへて居るのであつたが、其手を放して天井を仰ぐと、怪訝な顔をして椅子を放れて、窓の下へ行つて、之は又故々閉めてあつた窓の戸を一枚上へ押し上げて腰を捻つて、戸外へ衝と其の兀頭を突出すや否や、ぱつたり閉めて引込ま

した、何條堪るべき、霰は其の額から、耳から、頤の邊から、宛で氷柱を植ゑたやう。

恚る中にも自若として冷靜の態度を保ち、故らには耳を傾けて雨を聞かうともしないのは彼等士官の一群である。

稍あつて人々は恰も軍人の如く静まつた。

「障子をあげると、突然火の粉でせう。」  
いふ聲も沈むばかり、雨は愈々盛である。

「お夏さんが一番確乎して、其のまゝ、内裏様に  
 手をお懸けなすつたが、愛吉、鶏をつて一聲。聞棄  
 てにして私あ二階から飛び下りて、二ツ三ツ人の體  
 に打附かつたとはかし覺えて居ます、えゝ夢中でね、  
 駆けつけたのは裏口にある其の軍鶏の埒なんですよ。

何を悟つたのか、ケケツ／＼、羽ばたきをしてる  
 奴を引摺んで兩手で袖の下へ抱へ込むと、兩戸が一  
 枚ぱつたり内へ煽つたんですが、赫として顔が熱か  
 ったのも道理、見る間に裏返しに倒れ込むとめら／  
 へと燃えてませう。戸外は限もない狐火のやうにち  
 ら／＼ちら／＼炎だらけ。はツと後退りに飛ぶ拍子  
 に慌てゝつんのめつて、仰向けに倒れた奴でさ。最  
 う天井から紅い舌を吐いてるぢやありませんか。  
 目が眩んだ足の處へ、箱だか、鐵瓶だか重いものが  
 斜違に來て乗つかるといふ騒。百年目だと思つた私  
 あ、板戸も壁も突破る勢で横ツ飛びに表の方へ匆ね  
 出したんで、どしばたといふのが地の底へ刻み込む  
 やうに聞えるばかり。あツとも、きやつとも聲なん

ぞはしませんでした、門口へ出ると道も空も土器色にぱツとなつて、處々段々に憊う其の隈取つて血が流れたやうに見えましたつけ。

其中をね、彼處此方三四人、大きな蟻、影法師が映つたやうに宛然酔ツばらひの足つきで、ひよろ／＼しながら歩行いてましたが、希代なもんでございますね、道なら三町ばかり伸したと思ふと、哄と火の粉が浴びせて來ました。鶏は脇の處で恐しい羽ばたきをしますね、私あ其の煽で宙へ上りさうで足も地につきませんや。背後の方でも、前途の方でも、其時分に漸々ワツといふ人聲が陰に籠つて聞えまして。やがて私の身は何の事はない渦いて來る人間の浪の中に巻込まれてしまひました。

右左 透間のねえ混雜なんで、其奴あ皆火事場の方へ寄せるんでせう、私あ向うへ抜けようとするんでせう。

突當るやら、蹠跟けるやら、目も口も開かねえんで、何でえ！ 田舎ものが神田の祭にはぐれやしめえし、人ごみにまご／＼する事あねえ、火事に逃げ

るたあ何の事だと、おされて劍突を食ふ癩癩まぎれに、立直して引返さうとする、と氣が着きました。鶏を抱へてます、其奴は唯一言お夏さんに頼まれたから起つた事。

ホイ何のこつた、行くにも歸るにも此の騒ぎに揉まれちやあ、羽も翼も坊主にならあ、と吃驚して、背後は見ないで、抜けたり、潜つたり、呼吸ぐるしいはどの中をもぐつて出て、先づ水のある處へ行きましたがね。

水ツてのは何、深川名物の溜池で、片一方は海軍省の材木の置場なんで、廣ツ場。

一體堀割の土手續で、これから八幡前へ出る蛇の蜿つた形の一條道ですがね、洲崎へ無理情死でもしに行かうツて奴より外、夜分は人通のない處で、場所柄とはいひながら、其の火事にさへ、些とも人間が歩行きません。氣の所為か、かツ／＼と燃る中に、木竹の折れる音もするほど近間で居て、其で何と私の登音にばら／＼蛙が遁げ込みます。水の音を聞く

と一杯ぱいのんだき氣になつて、一呼い吸き吐ついたんですが、  
「はてな。」

「其處でお夏さんだ、何うなすつたらう。私が此の慌て方ぢやあ二階に残つた女連は氣絶たかも分らない。お夏さんはお夏さんで、雛を大切に取出しさうな劍幕だつたが、火急にも何にも内裏様一個抱く時分にやあ、火の粉を被んなすつたに違ひがないと、さあ、心配になつて堪りません。

矢でも鐵砲でも火事場へ飛んで歸つて、お夏さんの様子を見ようと、引返さうとすると、抱へて居る鶏なんです。

先刻の彼の場合にも、愛吉鶏をツてお謂ひなすつた、何う為よう、之をまあ。

葛籠長持と違つて、人の家へ抛放しに預けて來られるんぢやあ無し、庇つて持つて居た日にやあ、人混の中だつてうつかり歩行かれるんぢやあねえ。火の中から助け出したばかりで、跡をお去らばにしてえ位なら、お夏さんがお頼みはなさるまいし、私だつて頼まれる程の事ぢやあなし、困りましたね、何うも、何しろ活物だから始末が悪かつたらうぢやあ

ありませんか。

人通ひとほりのない土手どてだつて、軍鶏しゃもばかり置いて行きや、何處どこへ去いつちまふも知しれたもんぢやありませんね。見みりや溜池ためいけの中なかに舟ふねもあつたし、材木ざいもくもありましたが、水死どせき人を捜さがすやうに鷄とりを浮うかしとく數すうぢやありません、持扱もちあつかひましたね、全まく氣きぢやあ無なかつたんで、一羽は抱かへ込こんで跣足はだしで池いけの縁ふちをまご／＼して風ふうツてのはありません、我われながら薄うすぼんやり、何どうしてるのかと思おもひました。

火事くわじは未まだ盛さかんです。

すると灰はいのやうに薄赤うすあかい向むかうの路みちへ影かげがさして、四五人にんひとならひ一列いっぺつになつて來くるのがあります。土手どてを横よこに切きつて、あれから埋地うめちにかゝつた橋はしの、欄干らんかんが眞中まんなかで切きれて水みづへ折をれ込こんで居ゐようといふ、ペン／＼草くさの生はえてる袂たもとへ寄よつて、渡わたらうとする時分じぶんにやあ私わつしが居ゐる間近まぢかになつたから見みえました。

眞先まっさきが女をんなで、二番目ばんめがまた女をんな、あとの二人ふたりが矢張やつぱり女をんな、皆みなな顔かほの色いろが變かはつてまさ、島田しまだか銀杏いとうがへし返かへか、が

ツくり根が抜けて、帯を引摺つてるのがありませんね、  
八口の切れてるのがありませんね、どれもノ、小刻みに、  
歩行くと絡むのは燃立つてせう。一人々々に人形だの、  
雛の道具だのを持つてる、三人目の、内裏様を一対、  
両手に持つて、袖で掻合して胸に押着けて居たのが  
お夏さん、夜目にも確か、深川中探したつて、  
凡そ其の位なのは無いのですからね、

助かつた。

つかノ、と駈け寄つて、背後から、丁ど橋の真中へ  
其の一組のかゝつたのを、やあ、と私あ嬉し紛れに  
頓興な聲を懸けました。

屹と立留つて、黙つて私を見なすつた、其時のやうに  
お夏さんの、あんな氣高い凄顔を見たことはありません  
でしたよ。鬢の毛も亂れて居ます。其に、場所がそんな  
でせう、天を焦す明でせう。つい目の前に彼の、愛吉、  
鶏をツて謂ひなすつた二階の景色が見えるのに、  
急に變つて其なんでせう、こりや死んだ魂が直と此  
處へ映るのか、然うでなけりやお夏さんの守護をして、  
緋の袴の連中が火の中から化けて來たのだ。」

「丁ど其の時分下火になつたと見えまして、雲が颯とかゝつたやうに、一面赤かつた中へ黒味がさしましたわ、女連の姿は消えたやう、お夏さんばかりが判然と、ばつちりとした目の色も見えて、私が手の鶏を御覽なすつたが、何、あとののは張詰めた氣が弛んだか、足取が亂れて、あつちへふらり、此方へひよろり、一人は危険な欄干に凭懸りましたし、最う一人は何の事はない、其處へ打坐つてしまつたんです。手を取つて起して見りや、松ツていふ女中なんで、怪しいも怪しくないも、場所だつて不思議はありません。

全體此の橋も、池を渡つた向うも、舊は矢張り其時分の勝山さん位な御大家の庭だつたんで、橋がまた庭の景色の一ツだつたさうですが、馬、車なんざ思ひも寄らず、人ツ子だつて通りやしません。唯ね、材木を組んで筏を拵えて流して來るのが、此の下を抜ける時、何處でも勝手次第に長鍵を打込んで、突張つて、潜る位なもので、旦那が買

置なすつた。其の中綺麗にして、藤棚の池へ倒れ込  
んでるのなんぞ直したら、お夏さんの祈祷所見たや  
うのもの、勝山さんだけの辨天様の堂を建立しよう  
なんてね、いつて居なすつた、其の埋地へ遁げて來  
たんでさ。考へて見ると其なんですが、不意に打つ  
かつた時は此の世のことぢやあないやうに思ひまし  
たよ。」

「大分涼しくなつて來た。」  
と金之助は袖を合せて、想ひ出したやうに言ひつゝ  
も、頷き／＼聞くのである。

「へい、凄いやうな雨でございましたね、私あ何  
うなるんだ知らんと、お話をいたします内に氣が變  
になりましたつけ、可い鹽梅でございます。

否ね、私ばかりぢやあなかつたんで、火事場では、  
官女が前後を取巻いて、お夏さんが東の方に、通つ  
たと言ふ評判で、また勝山が焼ける些とばかり前、  
緋の袴を穿いた眞白な姿の者が、丁ど其屋根の上あ  
たりを走るのを、汐見橋の上で見た者がある、前兆  
だなんて種々なことを謂つたもんです。

やう／＼夜が夜の色になつて、濕つばい風が吹いて來ると、御新造様、其れから旦那が、あとさきになつて、女中が三人、私とお夏さんと、お雛様と軍鶏の居る其處の埋地へお見えなさいましたが、何方も箸一本持つちやあいらつしやらないんで、追々集つた、番頭小僧、どれも不残着のみ着のまゝ。

最う私が二階を飛下りると、入違ひに旦那と御新造様がお夏さんの處へ駆け上んなすつたツけ、傍に居た女中は助けてくれといふんでせう。手を合せて唯拜む程とちつてるのに、袂のさきを口に銜へてお夏さんは悠々とお雛様を片附けて在らしたつてね、皆來い、お夏が死ぬ、お雛様だけ出しておくれと、お二人が一生懸命。

其ですもの。

恚ういひますと、お夏さんが我儘三昧、親御は甘いばかりに聞えませう、けれども因縁事なんですよ、だつて勝山のものといつたら、池に浮してあつた材木まで焼けツちまひましたから。業の火とかい

ふんですな、恐おそろしいぢやアありませんか。  
其それでね、一度ひと其その埋うめ地ちで家うち中ぢゅうが寄よつたが最さい後ごで、  
あとは最もうちり／＼ばら／＼。」

「雛は皆助かりましたし、飾の道具いつたやうな物も、目立ったのは大抵出たんださうですが、珠だの、珊瑚だので飾った、天人が胸に掛けてるやうなびら／＼の下つた女雛の冠ですが、無くなつて、其から房のついた御簾のかゝつてる結構な、一品で三十兩、先刻も申しましたね、格別私なんぞも覚えて居る御所車が其ツ切になつたんですつて、何時まで経つても、お夏さんが太く氣にして居ますがね、固より金目にかゝはつたことぢやありません、彼の姉さんのことですから、へい。」

大方何でせう、人並はづれて雛を大事がんなさるんでも分ります、其處らの様子でも知れませんが、恁う謂つちやあ何ですけれども、お雛様を先づ戀しい方のやうにでも思つてるんぢやありませんまいか。然うすると、對手の女雛を自分ごつこにでも極めて居るんで、其の冠が失せたのも、許嫁の印の簪でも落したやうに思つてることとせう、婦人は天窓の物と謂ひますから。

實に碎けて居て、些ともみづからがない女だけれど、何處か恐しく品があつて、私なんざ時々我ながら頭の下がることありますもの。

ねえ先生、御所車と冠がなくなつたのを、氣にして鬱ぐ位なのが、今更ぢやありませんけれども、上野を歩行て、路傍で身體を洗つて、ちやぶ屋の姉やと間違へられて、癪の女を、一寸先生、お夏さんも然ういつて話しなすつたが、山河内の姫様といふと一件ものゝ女ですつさ。其奴を煽がされるなんて可哀相ぢやアありませんか。

否ね、龍宮の乙姫てえ素ばらしいのだつて、蜈蚣にやあ敵ひませんや、瀬多の橋へあらはれりや、尋常の女でせう、山の主が梅干になつて、木樵に嘗められたといふ昔話がありますツてね、争はれねえもんです。

全體ちやき／＼の深川ツ女が、根岸くんだりへ行つて、もゝんぢいに歌を習ふなんて、そんな間違つ

たことはないんです。郷に入つたら郷に従へだと、講釋で聞いたんですが、いかな立女形でも彼の舞臺ぢやあ睨が利かねえ、それだから飛んだ目に逢ふん  
でさ。

其が先生、一體がお夏さんは、歌だの手習だのは大嫌で、鴨川なんて師匠取をするんぢやあないんですが、唯今申しました其の焼け出されが只事ぢやありません。前世の業のやうなだから致し方はありません、柱一本立直らないで、其だけの身上が丸で。氣ばかりあせて居なさる中に旦那が大病、其の御遺言でさ、夏に我儘をさせ過ぎた、行末が案じられる、盆晝なんぞ止して手習をしてくれと、其處で發心をなすつたんだが、何に最う叩き止めツちまふが可うごす。其の足で藤間へいらつしやりや、御自分の方が活きた手本にならうてんで、え、私の仕返しや動かねえ縁切だ。お夏さんが之から行かうたつて行かれやしません、薩張して可うございます。へい、いち／＼何うも難有うございました先生。

あなたのやうな紋着を着た方が、私等を可愛がつて下さらうとは思はなかつたんで、柳屋のも便にす

るものはなし、此頃は御新造様が煩つて在らつしやるなり、彼の勝氣なのが、めつきり瘦せなすつた。  
力にならうといふのが私と軍鶏だから困つちま

ふ。  
「

と、つく／＼腕を組んであどけない、罪のないことを真心から言つて崩折れた。眞面目な話に酔もさめたか、愛吉は肩肱を内端にして、見ると寂しさうで哀である。雨は霽れた、人は湯さめがしたやうに暑を忘れた、敷居を越して溢れ込んだ前の大溝の雨溜で、しづくひ叩の土間は一面に水を打つたやう。

愛吉がいふ處も、大雨の後をそよ吹く風も、太く身に染みた様子であつた、金之助は改めて硝子杯を擧げ、

「最う一杯景氣をつけよう、大分引込まれて私まで妙になつた、お前にも似合ない何も鬱ぐにも當るまい、」

と、激ます人も何となく理に落ちて來たのである。

「えゝ、此位にして置ませう、何年ぶりかで不思議に慙うやつて折角眞面目になつたものを、又酔つちやあ詰りませんえ、ね先生、何うぞ可愛がつて下さいまし、私はくらひ酔つて其なりでも構ひませんが、お夏さんは眞個に誰も便にするものがないんですから、後生でございます。旦那方のやうな紋着を着た方は大嫌なんだけれど、何、實の處は私等を輕蔑して取合つて下さらないと相場が極つてるとおもひますから、じゃ／＼馬ですねてるんでさ、心細うございます。ほんとうにお夏さんは便りのない身でおいでなさるんですからね、御不便がありや、直

ぐにでも柳屋へ引張つて行つて見せてえや、而して此の先生がお前さんのことを身に染みて聞いて下さつたつて話したら、何んなにか喜ぶでせう。」と然も懐しげにいふのである。

金之助も他所事とは取らない氣色で、

「いや、私は之でなか／＼當世ぢやあ無いんだから、女の兒とお附合は些と困る、併しお前とは改めて朋達にならう。なあ、朋達——然うだ親類とでも何とでも思ひなさい。用に立つことがあつたら出来るだけ智慧も貸さうよ、身體も貸さう。うよ、込入つた話で其のお夏さんのことについてちや、こりや懸直無し私も一ツもの思ひだ、歸つてからも路々も條を辿つて考へよう、いや然しお庇でおもしろいといつちやあ濟まないやうな氣もする

ね。」

「唯、」

といったツ切、愛吉はしばらく差俯向いて居たが、思出したやうに天窓を上げて、

「飛んだ頂きまして、最う御免を蒙ります。」

「一所に出ようか、其處等まで同じ向だ。」

金之助は愛吉が返した、根岸の鴨川の討入の武器なる黒絲緘の五ツ紋を、疊んであるまゝ懐へ捻込んで、ボーイを呼んで勘定をすると、件の金袋を提げたのが其の金袋は蓋し代金を受納めるために持つて居るのではなく、剩金を出す用意をして居るものゝやう、規則正しく返したのに、銀一ツ添へて金之助は爰に長座を償つたが、斷るまでもなく、ボーイは之を別の衣兜に納れたのである。

「御機嫌よろしう、」

それと二人は卓子を挟んで齊しく立上つたのが、一所になり前後になつて出ようとする、横合の椅子から、

「やあ、」

と聲を懸けたのは、件の兀頭の小男であつた。

金之助ははじめて心着いて、はたと立留つて顔を見て、不意だといふ面色で更に見直したが、

「おゝ、何うして、」

と驚いて言つた。

爰に先刻からおみこしを据ゑて、愛吉の物語に耳を傾けたり、士官の方をじろ／＼見たり、或は空合を伺つてびつしよりの奇觀を呈するなど、慌てたやうな、落着いたやうな、人の悪いやうな、呑氣なやうな、殆ど端倪すべからざる、譬へば龍の如き否、寧ろ大雨に就いて龍を黙想しつゝありしが如き、奇體なる人物は、渾名を外道と稱へて、名譽の順風耳、金之助と同一新聞社の探訪員で、竹永丹平といふのであつた。

軒の柳、出窓の瞿麥、お夏の柳屋は路地の角で、  
 人形町 通の唯ある裏町。端から端へ吹通す風は、  
 目に見えぬ秋の音信である。

まだ宵の口だけれども、何となく人足稀に、一葉  
 二葉ともすれば早や散りさうな、柳屋の軒の一本柳  
 に、ほつかりと懸つて居る、一尺角くらゐな看板の  
 賽ころは、斜に店の灯に照されて、此方へは一が出  
 て、裏の六がまともに見られる。四五軒筋違の向う  
 側に、眞赤な毛氈をかけた床几の端が見えて、氷屋  
 が一軒、其には團扇が乗つてるばかり、涼しさは涼  
 し、風はあり、月夜なり。

氷屋の並びに表通から裏へ突抜けた薬屋の藏の背  
 があつて、壁を塗かへるので足代が組んである、此  
 の前に五六人、女まじり、月を向うの仕舞屋の屋根  
 に眺めて、いづれも、蹲つて雨上りに出た暮といふ  
 身で居る。

「え、もし。」

「然やうでございますね、」

「何うでせう、」

と口々に何れが何をいふのか知らず、低聲でひそ

／＼。

「ねえ、おい、」

「何うだらう、」

「然うさな。」

時々吸殻が呼吸をして、團扇が動くわ。

「構はず談じやうぢやあねえか、十五番地の差配  
さんだと、昔 氣質だから可いんだけども、町内  
の御差配はいけねえや。羽織袴で杖を持たうといふ  
柄だもの、かはつて謂つてくれねえから困るよな。」

「むゝ、だが何しろ打棄つちやあ置かれめえ。」

「もし、確に不可ますまいね。」

些と老けた聲で、

「然れば宜しくござりません、昔から申すことで、  
何しろ湯屋で鐘の音を聞くのさへ忌むとしてござり

ます。」

「而して詰る處、何に障るんですね。」

「否はじまりは地震かと思つてびく／＼して居たんで、暑さが酷かつたもんだからね。それといふ時の要心だ、私どもぢや、媽媽にいひつけて、毎晩水瓶の蓋を取つて置きました。」

「へい、火事ならまあ、蓋を取る内も早い方がいいといふんでせうが、地震に水瓶の蓋を取つて置くはをかしいね。」

「理詰ぢやあねえんでさ、先づいはゞ禁厭さ。安政の時に家中やられたのが、唯た一人、面くらつて水瓶の中へ飛込んだ奴が、不思議に助かつたと謂ひますからね、よく／＼運だ、あやかるだけでも可うございませう。」

「お待ちなさい、して見ると鐵さん。」

「え。」

「お前さんが此頃また毎晩色ものゝ寄席へ行くのは矢張其處等の地震除から割出したもんだね。」

「何故、何故、えゝ御隠居。」

「麴町の人だがね、同一其の安政年度に、十五人の家内で唯一人寄席へ行つて居て助かつたものが

ありますわい。」

「様あ見やがれ、俺が寄席へ行くのを愚圖々々吐しやがつて、鐵さんだつてお所帯持だ、心なくツて欠厘でも贅な錢を使ふものかい、地震除だあ、おたふくめ、」

「おや、それぢやあ地震よけに、いつも寄席に行つて、お前一人助かる氣かい。」

「何だと。」

「いゝえさ、お前一人助かれば女房は可いのか

よ。」

と其のかみさんか、女の聲。

「べらぼうめ、何を、何をいつてやあがる、」  
 と、何か言つていやあがる。

「鐵さんぐうの音も出さずさ、こりやお時さんが道理だ、はゝはゝ、」

齒の抜けた笑ひに威勢の可い呵々が交つて哄とな  
 ると、件の仕舞屋の月影の格子戸の處に立つて居た、  
 浴衣の上へ一寸裕羽織を引掛けた艶なのも吻々と  
 遣る。實はこれなる御隠居の持物で。

鐵と謂はれたのは躍氣となり、

「やい、ぢやあ汝あ何うだ、此の間鐵砲汁をや  
 ツつけた時一箸も食やしめえ。命取だ。恐しいとい  
 つて身震をしやあがつて、コン畜生、其癖俺にやあ  
 三杯と啜らせやがつて、鍋底を又装りつけたらう、  
 何うだ、やい、もう不可ねえだらう。勿體ない打棄  
 った處で犬だつて困るだらうと謂つたぢやあねえか、  
 犬だつて困るよ、命取をよ、亭主が食つてるのを見  
 て汝一人助かりや可いのかい、やい、七面鳥。」

「東西！」

「さあお家の亂れた。」

「さては此の前兆かつ。」

傍より、

「もし何でございます。」

「牝鶏のあしたすると言つて、牝鶏が差し出るか

らよ。」

「え、牝鶏があしたなら構ひませんが、恚うやつて頭を集めて居るのは、柳屋の雄鶏が宵鳴をする

からでございます。」

「うゝ成程、雄鶏だつたの。」

「御串戯、」

「これはやられた。」

「皆様笑ひごとぢやありませんぜ、火に障るつ

ていふのぢやありませんか、ねえ御隠居。」

「然れば 謂うて。」

「御隠居さんなんざ齒に障りませうね、柳屋のは

軍鶏だから。」

「誰だ、交ぜらない、嘉吉が處の母親さへ、水天宮様へ日參をするといふ騒だ。尋常事ぢやあねえ、

第一 又萬に一つ何事もないにした處

が、心持が悪いぢやあねえか、宵鳴なんて厭なものだ、ほんとうに何うにかしようぢやあねえか。」

「何うするツて、殺しつちまへば可いんでせう。」

「然うだとよ。」

「其は最う禍の根を斷つだから、宵鳴をする鶏は殺すものとしてあるわさ。」

「其處で、」

「謂つたつて彼の女が肯くものか、何うして可愛がることゝいつたら、」

恐しく聲を密めて、

「御隠居様の前ですが、お内の猫位なものぢやありませんぜ。」

「先づの、  
とあやふや。」

「だから差配さんに懸合つて貰つてよ。」

「其の差配さんが今謂ふ杖だ。」

一段聲を張上げて高らかに策を獻ずるものあり。

「交番々々。」

「馬鹿をいへ、杖でさへ不可ねえものが、洋刀で始末にをへるか。構ふこたあない、皆で押懸けて行つて彼の軍鶏を引奪くツて了ふとするだ。」

「大勢でか、些と變だな。」

「何さ、對手が何うといふんぢやあないが、一人や二人ではさすがに話しくいて。」

「氣の毒なり、可哀相でもあり、」

「まあ、何にしる困つたものだ、今夜にも宵鳴が留みさへすりや、あゝもかうもないんだけれど、留まなきやあ、事のねえ内よ、氣の毒だが仕方がねえ。」

「風はさら／＼と軒を渡つて、あゝ、柳屋で鶏が鳴

く。

「藏人、藏人。」

涼しい聲で、たしなめるやうに呼懸けながら、店の左手に飾つた硝子戸の本箱に附着て、正面から見えるやう、雑誌、新版、繪草紙、花骨牌などを取交ぜてならべた壇の蔭に、唯一人居たお夏は、小さな帳場格子の内から衝と浴衣の装で立つと齊しく、取着つきに筆笥のほのめく次の間の隔の葭簀を蓮葉にすらりと引開けて、ずっと入ると暗くて涼しさうな中へ、姿は消えたが、やがて向直つてつか／＼と店へ出た、乳のあたりに其の胸を置かせて、翼に手をかけ抱いたのは、お夏が選んで名をつけた、藏人といふ飼鶏である。

「何故今時分鳴くんだね、」と人にものを謂ふやうな、然れば宵の一聲にお夏が忙がはしく立つたのは、恰も寝かしたけた嬰兒が、求めて泣出すのに、嫁が其の乳房を齧らすが如き趣であつた。

「お前、寂しいのか。」

淋しいのかと謂つて、少しく抱きあげて、牙の如く  
鋭き嘴にお夏は頬の觸らぬばかり、

「私だつて店に獨で居るんだもの、我儘でござい  
ますよ。」

くる／＼と動かす藏人の目は光つて、ものに動ず  
る風情あり。

「母様は鹽梅が悪いし、寝て在らつしやるぢやあ  
りませんか、人がね、宵鳴をするツて忌がります。  
不可いよ、厭だよ、幾度言つて聞かせるか知れない  
のに、何故言ふことをお聞きでない。」

と品ある目で屹と見たが、傾けて居る片頬から顔  
の色が和いで、

「灯を見せてあげようね、宵ツ張たらないのだも  
の。」

店の眞中へ二足三足、あかり前へ、お夏は釣洋燈  
の下に立ち寄つた。新版ものゝ表紙、錦繪の三枚續、  
二枚合せ、一枚もの、就中飼鶏がばつと色彩を放  
つて、金、銀、翠、紅、紫、あらゆる色のこゝに

相應ずる中に、墨繪に肖たる立姿は、一際水が垂りさうである。

「お祭だわねえ、灯がついて賑かだらう。」  
飼鶏は心ある如く眩い洋燈をとみかう見た。楯をも碎くべき其の蹴爪は、いた／＼しげもなくお夏の襟にかゝつて居る。

「彼方を御覽、綺麗ぢやあないか、音羽屋だの、成田屋だの、片市　　おや／＼誰かの姫君様  
といったやうな方が在らつしやる、いやに澄してさ、高慢な風ぢやあないか、お前知つてるかい、何が合點さ、」

と言ひかけて打微笑み、  
「何にも分らない癖に、おもしろいかい、然うかい。之は相撲の番附、此方が名人鑑、向うが凌雲閣、彼が観音様、瓢箪池だつて。喜藏が何時か淺草へ供をして來た時のやうだ。お前あの時分はおとなしかつたつけ、此頃はまるで嬰兒のやうぢやあないか、夜鳴をして、良い兒だから最う些と遊んだら彼方へおいで、可いかい。夜になつて埒へ入るのは

何もかはつたことはないけれど、何だか淋しさうで可哀相だねえ、母様と二人ばかりになつたつて、お前、私が居れば可いぢやあないか。」と、いつか獨言をいひながら段々軒に近づいた。

「まだ見たいのかい、さあ、何にしよう、これは軍の繪でございます、」と謂つてお夏は胸を反らし、黒目勝なのを仰向くと同時に、両手で上へ差上げたが、翼の尖が鬢にかゝつて、

「あら髪がこはれるよ。」

と思はず手を放した、飼鶏はどんと身を落して、突立つて土間へ下りた。

溝石で路を劃つて、二間ばかりの間の軒下の土間に下りた、藏人は踏留まるが如くにして、勇ましく衝と立つたが、秋風は静々と町の一方から家毎の廂を渡つて来て、丁ど此の小さな散際の柳を的に、柳屋へ音信れたので、葉が一齊に靡くと思ふと、やがて軍鶏の威毛が戦き揺いで、それから鶏を手から落した咄嗟の、お夏の水髪を二筋三筋はら／＼と頬に亂して、颯と吹いて其のまゝ寂莫。

此の名残であらう、枝に結へた賽ころは一ツくりと廻つて、三が出て、柳の葉がほろりと落ちた、途端に高く脚をあげて、軍鶏は店前をとツ／＼と歩行き出した。

お夏は片手をついて腰をかけて、土間なる駒下駄の上へ一片の雪かとはかり爪先をかけて、うつかりとなつた。フト其の飼鶏を念頭から奪ひ去られたのであらう、もの思をする人の常として、恚うは思ひ懸けず屢々心を失ふのである。

其間に軍鶏の健脚は、猫の額の如き店頭を往復することをもつて満足が出来なくなつた。

嘗て黒旋風愛吉をして、お夏の一諾を重ぜしめ、火事のあかりの水のほとりで、夢現の境に誘つた希代の逸物は、制する者の無きに乗じて、何と思つたか細溝を一跨ぎに脊伸びをして高々と跨ぎ越して、小路の眞中へずつと出て、恰も西側を離れて、これから東側へ廻らうとして、狭い町の屋根と屋根との中空へ来た、月の下にすつとこそ。

土藏の前に集つた一團の人の驚きは推するに餘りある次第であらう。

渠等が額を集め、鼻を合せ、呼吸をはずませて、恰も魔界から最後の戦を宣告されたやうに唼して居る、忌むべき宵鳴の本體が、十間とは間を措かず忽然として顯れたのであつたから。

剩へ這個の怪禽は、月ある町中へつゝ立つと齊しく、一振りふつて首を伸して、高く蒼空を望んで又

た一聲、けい引おう！と叫んだ。

之をしも忌み且つ恐れたる面々は、鳴聲があとを引いて、前町裏町すべて界限の路地の奥、土藏の隅、井戸の底、屋根裏、階子の下、三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも遠く響いて押擴がつて行くに連れて、次第に霧か起り、月がかくれて、殆ど名状すべからざるありさまに變ずるが如く見て取つた。

鶏鳴曉を報ずる時、夜のさまが東雲にうつり行く状は、いつもこれに變らぬのであるけれども、月さへやゝ照し初めたほどの宵の内に何事ぞ。

宵鳴を以て、火の神の町を焼く前駆とする者の心には、其の聲の至る處、路地の奥、土藏の隅、井戸の底、屋根裏、階子の下、三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも、燃えむとして火氣の蔓り傳はる心地がして、あはれ人形町は柳屋の店を中心として眞黒な地圖に變ずるのであらうと戦慄した。

「ワツ！」

古浴衣を蹴返して轉がるやうに駆出したのは、町

内う無な事いのぶ日じ参にをつするさといんふ、  
嘉か吉きがち家とのこ婆は様あぢまや。

唯見れば白髪を振亂し、おとがひそそ 頤細つて瘦せさらば  
 ひ、年紀六十に餘るのが、肉の落窪んだ胸に骨のあ  
 らはれたのを搔いだけけて、細帯ばかり、跣足で然  
 も眼が血走り、薪雜棒を引搦んで、飛出したと思ふ  
 と突然、

「火事だ、」と叫んで、軍鶏を打たうとしたが、  
 打外した。

藏人は咄嗟に躲して、横なぐれに退つたが、脚を  
 揃へて、背中を持ち上げると礎と婆に突かけた。

「火事だ、」  
 又た喚いて件の薪雜棒を振廻す、形相 恰も狂者  
 の如く、否、如くでない、正に本物である。蓋し小  
 金も溜つて、家だけは我物にしたといふから、人一  
 倍、寧ろ十倍、宵鳴に神經を悩まして、六日七日得  
 も寐られず、取り詰めた果が逆上をしたに違ひは  
 ないので。

白髪は飛んで、翼は亂れた。あれよと見る間に、  
婆と軍鶏と、とんと當り、颯と分れて、月下に唯ぐ  
るり／＼と廻つた。

「汝、業畜生、」と激昂の餘り三度目の聲は皺  
嘎れて、滅多打に振被つた、小手の下へ、恐氣もな  
く玉の顔、夜風に亂るゝ洗髪の島田を衝と入れて、  
敵と身體の擦合ふばかり、中を割つて引懸けにぐい  
と結んだ帯の背後へ、軍鶏を庇つたのはお夏である。

「お婆さん何をなさるんです。」  
一寸横顔で振返つて、

「叱！」

軍鶏も竦むやうであつた。婆は恐しい目をしながら、  
胸に波を打たせて肩で呼吸だ、齒を喰しめて口  
が利けず。

恚る處へ殺氣を籠めて、どか／＼と寄せて來た、  
お夏と藏人とを中に、婆の右左へかけて取巻いたの  
は土藏の前に居た連中。

「何だ、火事だ。」

「火事だ？」

と口々に尋ねたが、之は事件の緒口を引出さうとするに過ぎない、皆々は云ふまでまなく、其間の消息を解して居た。

「こ、こ、こいつぢや、火事は此奴ぢや。」

人数が襲ひ來つたので思はずおさへて居た袂が弛んだ、お夏の手を振放して、婆は藏人に躍り蒐つた。

「何をするんですよ。」

遮らうとするお夏の帯を、ぐいと留めた者がある。同時に婆を突退けて、

「まあ、待ちなさい、」

と一名。

發奮をくらひ、婆は尻餅をついて、熟柿の如くぐしやりとなつたが、むつくと起き、向をかへると人形町通の方へ一文字に駆け出した、且つ走り、且つ聲を絞つて、

「火事ぢや、火事ぢや。」

「あれ。」

嬰兒を懷に確乎と壓へ、片手を上げて追懸けたのは、嘉吉の家の女房である、亭主其の晩は留守さ。

「さてお夏さん、思切つておくんない、二三日前から薄々様子は知つて居なさらうがね、町内ぢやあ大抵氣にするツたらないんだから、一番ね、思切つて私等に鶏をおくんない。何も宵鳴をすりや怱うと、政府からお觸が出たわけぢやないけれども、可うがすかい、心持だ。悪いことは謂ひませんや、お前さんのお為に其の方が可からうと思ふからね。」

お夏は黙つて圍の中に居るのである。

「何うです、御承知だらうね、町内ぢやあお前さんの家が 第一新顔だから、何か其邊

にもものでもあるやうに思はれては迷惑、可うござかい、分りましたらう。」

「軍鶏を寄越せつて謂ふんですか。」

「然やうさ。」

「連れてつて何うなさるの。」

「占めるんでえ、殺つちまふんでえ。」

と鐵だらう、打まけた。

慌て騒ぐと思の外、お夏は莞爾して、

「不可ませんわ。」

「不可ねえと！」

「まあ、まあ、静かに言つても分ることだ。もし、不可ませんなんて然う平氣で居られぢやあ困るぢやあごわせんか。一體、母様に懸合ふ筈なだけれど、御病人だからお前さんだ、見なすつたらう、

嘉吉さん許のなんざ、あの騒。

「御免なさいな。」

と尚ほ笑ひながら平氣なもので、お夏は下に居て片袖の袂を添へて左手を膝に置いて、右手で藏人の背を撫でた。

「仕やうがないねえ。」

顔を見合せたのが二三人、談判委員も些と案外といふ語氣で、

「暢氣に何うも軍鶏と談なんかして居られちゃ困りますよ、ちよこまかした事とは違ひますぜ。」

お夏は振仰いで、

「ですから御免なさいまし。」

「あやまるの、あやまらないのといふやうな岡つたるいこつちやあ無いんだといふに、困つちまふな。」

「私だつて困つて居る、」とお夏も差俯向いた。

「月夜で門へ寄合つたといふ條、大きな野郎が五人三人、恚うやつて來たんだから、よく／＼の事だと思ひなさい、ね、さゝ、これが一番分が早い、分

りましたか。」

退引かせず詰寄るに従つて、お夏は益々庇立、藏  
人に押被さるばかりにしつゝ、

「最う屹とですよ、屹と鳴きはしませんよ、大丈  
夫だよ。私がよく言つて聞かせますから。」

「おや／＼、此の上軍鶏と話なんぞされて堪るも  
のか、氣味の悪い、何てツたつて何うせ助けては置  
かないんだ。へん、謂つて聞かせる、人間の言ふこ  
とを肯いて鶏が鳴かないやうなら、勝手の悪い時は  
夜が明けねえや。」と嘲笑つた者ある。

お夏は屹と見て、

「何、」

「何、何たあ、何たあ何だい、經師屋の旦那に向  
つて、何たあ何だい、そんな口は軍鶏に利け。」

「唯、軍鶏の方が、お前さん方より餘程いふこと  
が分りますよ。」

「皆様。」

一同の眼はお夏に注いだ。

「面倒だ、ヤツつけませう、可いや、手籠が悪いといふ方がありや後で又た對手になる、留めなすつたつて合點しねえ、さあ、退け。」

腕まくりをして掴みかゝらむず劍幕であるのに、お夏は更に意に介しないか、眼あるものならば面をも向けられないほど、品ある顔に笑を湛へて、

「其でも眞個に分らないんだもの、あやまつたら可いぢやありませんか。」

自ら疑はないことまた恚の如きはあるまい。將に突飛ばして軍鶏を奪はむとした男も、餘りのことに手が出なかつた。

其が猶豫つたので、却つて傍からいきり出した。

彼方此方耳ツこすりをして、

「エ、」

「然やうさ。」

衆議一決。

四十二

兩人あり、其時、挟んでお夏の左右より、齊しく袖を引いて、

「さあ放した、退かないか。」

「餘り強情を張りなさりや仕方がない、姉さん、お前さんの身體に手を懸けますよ。」と斷つて立懸る、いづれも門札を出した、妻子もあらうといふ連中であるから、事爰に及んでも無法に拳は握らぬので。

「何をするのよ。」

「いや、何うもしねえ、其ン畜生を渡せてえんだ

い。

「これ。」

「厭ですよ。」

「厭？ 一人前の男に向つて、そんな我儘な挨拶があるものか。」

「分らなけりや分らないで、可いから町内の交際といふものを教へてやらう。」

「姉さん、蟲の薬だ、我慢しな。」

「厭、」

といふ時、黒髪は崩るゝ如々く藏人の背に揺れかゝつて眞白な腕は逆に、半身捻れたと思ふと三人の者に引立てられて、風の柳の靡くやう、横ざまに身悶えした、お夏は然も口惜しげに唇を歪めたが、眦をきりゝと上げて、

「私を、」

私を、

私を、

「と怒を帯びた聲強く、月に瞳を見据ゑたが、颯と耳柔に紅を染めた。胸を反して、雪なす足を折曲げて、

「あ痛々々々。」

忽ち血の氣は頬に消えて、色は一際白ずむのである。

「蟲殺した、些あ痛えや。」

「掴へツちまひなせえ、」とお夏を押へたのが早速の懸聲、それもこれも瞬く間で。

「危え、わツ！」

といつて、今、お夏を引立てたのを見るや否や、軍鶏の頸を捕へようとした鐵は、兩の掌で目を蓋して背後へ反つた。

軍鶏は其の肩の邊りまで素直に宙へ飛んだのである。

其の脚の地に着くともろともに身を翻へしてどんと突くと、

「おツ、」と喚いて、お夏の腕を捻つて居たのが手を放して飛退ると、袖が斷れたか、とぐいと拂つて、お夏はいま一人を振放して、衝々と月影に姿を消したが、柳の下を潜るが疾いか、溝を超えて、店へ駈け上ると奥へ入つた。

後を追つて、奇異なる斷々の聲を叫びながら駈け出した藏人を、ばら／＼と追詰める連中の、或者は

右へ退き、あるもの 或者は左へ避け、三人五人前後に分れて、さいめ 賽の目のやうに散らばつた。

要こそあれ滅多當に拳を廻して、砂煙の渦くばかり、くる／＼舞して働きながら、背後から割つて出て、柳屋の店頭に突立つた、蚰蜒眉の、猿眼の、豹の額の、熟柿の呼吸の、蛇の舌の、汚い若衆を誰と かする、紋床の奴愛吉だ。

「待ちやあがれ此奴等、私が出入先を何うするんだ。」

奥から引返して出たのはお夏、五七人の男を對手に、いかに負けじとて何うする事ぞ、右手に長煙管を提げたり。兼て煙草は嗜まぬから、之は母親の枕邊にあつたのだらう、お夏は此の得物を取りに駆込んだのであつた。

「お嬢さん。」

「愛吉か。」

其まゝ店から下りさうなるを、びつたりと背でおさへて、愛吉は土間一杯に身構へながら、件の賽の

目の如き足並の人立に向つて、かすれた聲、  
「やい！何方様もよくおいで遊ばされやがつたね、  
へへへへへへ、何御用でございますか、仰せ聞けら  
れまし、へへへへへへ。」

四十三

「七錢三厘、二錢、五錢、十五錢、一錢、二十五錢、三十錢、可いかい。」

「へい、可うございます。」

愛吉は神妙に割膝で畏り、算盤を弾いて居る。間を隔てた帳場格子の内に、掛硯の上で帳面を讀むのはお夏で、釣洋燈は持つて來て臺の上、店には半部を下してある。

「十錢、十五錢、四十錢、五十八錢。」

「旨えもんですぜ。」

「こんなに遅く讀むのを置くのぢやあないか、些とも旨いことはありやしない。」

「いゝえさ、商も恚うなりや、占めたものだといふんでさ。」

お夏は何にも謂はないで微笑みながら、

「八錢、七錢、五錢、合せて十二錢、三十二錢、

十六錢。」

愛吉慌しく急込んで、

「おつと！と。」

「又かい。」

「大概可うがすがね。」

「算用が大概ぢやあ因るからね、又遣損なつたんでせう。」

「えゝと、今何でさ、合せてなんて、餘計なことを言ひなすつた時、拇で引懸けて、上が下りて一ツ飛んで入りましたつけ。はてな、」

お夏は帳場格子に肱をついて、顔を出して、愛吉が手なる算盤を差覗いた。間近に成らす洋燈の明に、唯見れば喧嘩の名残である、前髪が汗ばんで居た。

頬にかゝるのは愛嬌毛で、

「幾ツ入違へたの、お直しな。」

愛吉は小指で一寸々と耳を掻き、

「珠を幾つ遣損なつたか、其が分りますと可うがすがね。」

お夏は肱を掛硯の上へ支き直した、明の後へ胸を引いた。

「最<sup>も</sup>う此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>へお寄<sup>よ</sup>越<sup>こ</sup>しなさい。」

愛<sup>あい</sup>吉<sup>きち</sup>は一<sup>ぎ</sup>議<sup>ぎ</sup>もなく、算<sup>そろ</sup>盤<sup>ばん</sup>と一<sup>しよ</sup>所<sup>じよ</sup>に額<sup>ひたひ</sup>を突<sup>つ</sup>出<sup>だ</sup>し、お辭<sup>じ</sup>儀<sup>ぎ</sup>をして、

「何<sup>ど</sup>うぞ願<sup>ねが</sup>ひます。」

入<sup>い</sup>違<sup>れ</sup>ひにぽんと投<sup>なげ</sup>出<sup>だ</sup>す、帳<sup>ちやう</sup>面<sup>めん</sup>を受<sup>う</sup>取<sup>け</sup>つて、愛<sup>あい</sup>吉<sup>きち</sup>は膝<sup>ひざ</sup>の上<sup>うへ</sup>。

「讀<sup>よ</sup>みませぬ。」

お夏<sup>なつ</sup>は前<sup>まへ</sup>髪<sup>がみ</sup>の下<sup>した</sup>へ、美<sup>うつく</sup>しい指<sup>ゆび</sup>を一本<sup>ぼん</sup>、珠<sup>たま</sup>を狙<sup>ねら</sup>つて傍<sup>わきめ</sup>目<sup>め</sup>も觸<sup>ふ</sup>らず、

「さあ、」

「確<sup>しつかり</sup>乎<sup>か</sup>おやんなさい。」

「あゝ、」

と眞<sup>ま</sup>面<sup>めん</sup>目<sup>め</sup>である。

「えゝと、恚<sup>か</sup>うだに寄<sup>よ</sup>つて、はじまりから遣<sup>や</sup>りますよ、拾<sup>せん</sup>錢<sup>なり</sup>也<sup>なり</sup>。」

「あゝ、」

と置<sup>お</sup>く。

「八<sup>せん</sup>錢<sup>りんなり</sup>八<sup>りんなり</sup>厘<sup>なり</sup>也<sup>なり</sup>、可<sup>よ</sup>うがすかい。」

「あゝ、」

と置く。

「三十五錢也。」

「あゝ、」

と置く。

「それから二十八錢也。」

「あゝ、」

愛吉は目を擦つた。

「お嬢さん、貴女は手習はからつぺたゞつていふんですが、此の字は細くつて綺麗ですね。」

「あゝ。」

「おつと、又二十四錢也。」

「あゝ、」

と置く。

「違つた、二、二、二、二十二錢、然う、然う。」  
と獨りで狼狽へて獨で落着く。お夏は後生大事に、  
置いた處を爪紅の尖で壓へながら、

「ちら／＼するね、吃つと飲んでおいでだよ。」

「おつと、八錢也。」

早速珠を弾いて、

「あゝ、」

「何うも一ツ一ツ、あゝと返事をなさつちやあ、  
其の間にぼつ／＼、私なんざ及びツこなし、旨いも  
のです。」 「旨いもんです。」

とお夏は珠を凝視めたまゝで莞爾する。

愛吉はけろりとして、

「お次が二十八錢也。」

四十四

「お夏や。」

折をりから奥おくで衰おとろへた聲こゑして呼よんだのは、病やまひの床とこに臥ふして居ゐるといふ母おつかさん様。此この聲こゑを聞きくと、愛あいきち吉きちは胸むねを折をつて、肩かたの中なかへ項うなじを竦すくめて、口くちをむぐ／＼と遣やる。お夏なつは之これを見みぬやうにして一寸ちよいと見みながら、

「母おつかさん様。」

「おゝ、いゝえ、來くるには及およひません、勘かんぢやう定ぢやうをし  
ておいでか。」

「唯はい、」と輕かるく言いふ。

「御ご苦く勞らうだの。」

「母おつかさん様、今夜こんやは愛あいきち吉きちが來きてくれまして、種いろ／＼々々あの  
交まぜかへしたり、下へ手たな算そろばん盤ばんを置おいたり、間まち違がつた  
ことをつたりしますから、おもしろくツて可ようご  
ざいますよ。」

「酷ひどいことを、」

と口くちの裡うち、愛あいきち吉きちは苦にがい顔かほをして、お夏なつを怨うらめしさ  
うに見みる目めをばちくり。

「愛吉、難有うよ。」

「これは、」と額を押へたが、隔てゝ居れば見えもせず、聞えもせず、目のあたりのお夏にはどんなに可笑かつたらう。

「母様、愛吉があんな風をいたします。」

愛吉はじたばたしたが、くるりと坐り直つて奥の方に手をついた。

「何ういたしまして、えゝ、水をつて申しますと、平時のとほり裏長屋の婆さんが汲込んで行つたと仰有るんで、へい、もう根つから役に立ちません。」  
と膝を擦つたり、天窓を搔いたり。

「へい、何でございまして、其の、」

「何が何うおしなのさ、」

とお嬢さん人の悪い。

愛吉は又た慌てゝ、

「其の、何でございまして、へい。」

「佃島のは達者かい。」

「えゝ阿母でございますか、えゝ、ひびん／＼い

たしてをります。え、毎日のやうにもお伺ひ申し上げませんければなりません、いつでも然う申しちやあね、濟まないツて言ひますんでございますが、あゝして一人で店を行つて居りますし、其に此頃ぢやあ、度々上ると、お夏様が氣を揉んでお構ひ遊ばして、却つてお邪魔だからと、こんなに申しまして、へい。

「然うかい、お前が一寸々々来てくれるんだもの。佃島からは大變だ、今度逢つたら宜しくと申してくんなよ。」

「難有うございます、私は何うも些とも御用にや立ちませんで、ほんのもうお嬢様の癩癩、」  
途端にお夏が帳場格子をコトノと叩いて氣を着けた。振向くと眉を顰めて、かぶりを振つて見せたので、

「癩、」

と行詰り、

「癩 癩なんぞお起しなすつちやあ不可

ません、紋床の親方なんぞも申しますが、氣永に御養生 なさいませんと、お焦れなさるのは一番毒で

すつて、

「といひかけて、額の汗を拭ひながら、愛吉は這身になり、暗い蘆戸を覗入れるやうにして、

「もし御新造様え。」

「稍あつて、

「あいよ。」

「而して早くよくおんなすつて、又お襟でもあらして下さいまし、然うまづくはありませんや、剃刀だけは用に立ちます。」

としんみりする。

「涼しくなつたら可からうと思ふよ、今夜あたりは餘程心持が可いやうだよ。」

「暫時言が途絶えたが、

「お夏や。」

「母様。」

「先刻うと／＼して居ると、戸外が大分騒がしかつたやうだつけ、」

愛吉はぎよつとして、又た項を竦め、

「そうら。」  
「何<sup>なに</sup>？あれは。」

四十五

「何でございますか、向うの嘉吉さんの所の婆さんが気が狂れて戸外へ飛び出したもんですから、皆で取押へるツて騒いだんですよ。」

とお夏は自若としていつて眞顔で居る、愛吉は苦笑、又苦笑。

「然うかい、飛んだこツたね、而して何うなりました。」

「火事だ火事だといつて表町の方へ駆出して行きましたつけ、暫時すると角の交番のお巡査さんが連れて戻りましたよ。」

自分かゝり合のことは丸抜にし言ひ紛らした。お夏は母親の前を繕つたのであるが、しかし事實で。

先刻丁度來合せた愛吉が、常に口にするやう、お夏の癩癩を引受けて、町内の人々と謂ひ争ひ、すはや、掴合の始りさうになつた時、恰も可し、婆を捕へて、彼の嬰兒を抱いた女房を従へて、嘉吉の宅へ届けるため、角の交番から出張したのが、見ると騒

動、コヤノと叱り留めて、所得税を納める者まで  
入交つて、腕力沙汰は、おい、何事ぢやい。

雙方聞合せて、仔細が分ると、仕手方の先見明な  
り、杖の差配さへ取上げさうもないことを、如何ぞ  
サアベルが頷くべき。

銘々自分勝手な迷信から、他人の持物を浸さうと  
する、其も方角が悪いといつて、掃溜の置場所を變  
へよとでも謂ふことか、鶏を殺さうとは沙汰の限り。

なほ一人一人、其がためにと申立てるが、鶏の宵鳴  
で氣が違ふほどの者は、犬が吠えると氣絶をしよう、  
理非を論ずる次第で無い。火事だ、  
火事だと駈け廻つて、いや火の玉のやうな奴、却つ  
て其の方が物騒ぢや、家内の者注意怠るな、一同の  
者、屹と叱り置くぞ、早々引取りませい、とお捌き  
あり。

彼方でも此方でもぶつ／＼がら／＼、口小言や  
ら格子の音。靴の響が遠ざかつて、此の横町は靜に  
なつたが、嘉吉が家ではなほばた／＼するので、う

るさいと言つて、お夏が半部を愛吉に下さした、其内に藏人は舊の閨、煙管もそつと、母親の枕許へ、其で事済となつたのであるが、寐つきなり殊に病の疲れ、知らぬと思つて居た母親に尋ねられて、お夏は落着いても、胸は騒いだのであるけれども、之も案ずるより産むが安かつた。

「愛吉、」

「え、」

無言で目を合せて居て、やがてのこと。

「あの、母様。」

黙つて返事がないから、

「寐なすつたよ。」

眼をニつて呼吸を凝した、愛吉は吻とばかり、  
「可い鹽梅、確ですか。」とそつといふ。

「始終すや／＼して在らつしやる、先刻もよく寐て居なすつた様だつて。」

「其で彼の煙管などを持出して、眞個に彼を揮舞すつもりでございましたか。」

「むゝ、」

とお夏は打領く。愛吉驚いた風で、

「途方もねえ。」

「私にだつて一人や二人は打てようぢやあない

か。」

「飛んでもねえ。」

お夏は澄したもので、

「不可いか不知？」

「不可いたつて、可いたつて、そんな身體で、あ

の中へ揉込まれて、串戯ぢやありませんぜ。髪の毛

でもつかまつたら何うします。」

「まあ、」

「えゝ？」

「然うね。」とわけもなく合點する。

愛吉は乗出して、

「暢氣ぢやあ困りますな。」

四十六

「だから私が何時でも言ふんぢやございませんか、荒いことは軍鶏と私とで引受ますツて。ですから私におつしやるまで、我慢をして居なさらなけりや不可ません、眞個ですよ。御新造様がどんなに心配をなさるか知れませんが、可うがすかい。」

「其でも打棄つて置くと殺されるぢやあないか、鶏を寄越せつて謂ふんだもの。」

「そりや最う。否、濟んだ事は仕方ありませんが、之からもあることです、これからの事ですよ。だつて先刻も私が來合せましたから宜かつたやうなものゝ、何うして立至つた場合なら、貴女一人で叶ひつこがありますか。何うせ叶はねえので見りや、怪我なんぞなされない方が割方でございませう、威張つたつて婦人だ、何を為得るもんですか。ねえ、」

「はい、然やうでございますよ。」

「そら、御覽なさい。」と愛吉は説破し得たり

といふ顔であつた。

「愛吉、」

「へい。」

「私が来たから可いやうなものゝと、お言ひだがね。」

「えゝ、然やうさ。」

「私は然うとは思ひません、」と莞爾々々する。

怪訝な顔色で、

「はてね。」

「私は巡査さんが見えたから其で助かつたと思ひますよ。」

「や、成程。」

「何うだい。」

「へゝゝゝへゝゝ、一言もござなく、」

「續けさまに天窓を掻き、」

「ですがね、お嬢さん。」

「あゝ。」

「私も深川のお宅へ泣込んで参りました時のやうに、何時も弱くばかしはございませんぜ。あの頃は何でも恚う二三人とは謂ひませんや、一人でも向う

へ廻まはして、わツといふと、

愛吉あいきちはぎよツとする仕方しかたをして、

「最もう目めがくらみました。何なに、どんな目めに合あはうかと危険けんのんだから塞ふさぐんで、卑怯ひけふに生命いのちが惜をいと思おもふんぢやありませんけれども、嘸痛さそいたからうと、あらづもりをするんでさ。」

「まあ、」

「尤もつとも、何なにですか、一寸ちよいとさきは分わからないといつた工合ぐあひで、からだらしがありませんでしたが、段々だん／＼馴なれて来てお前まへさん、此頃このころぢやあ、立身りつしんになりませうと、喧嘩けんくわの蟲むしが聲こゑを懸かけると、其それから明あかるくなりますぜ。そら拳固げんこだ、どツこい足蹴あしげだ、おツと其その手てを食くふものか、其その内うちに一人ひとりつんのめるね、状さまあ見みやがれと、一々がつてん合點がが出来できますだらう。何どうです、強つよくなつた證據しやうこですぜ。親方おやかたも言いひましたつけ、撲なぐりあひに目めを塞ふさがないやうになりや、喧嘩流けんくわりうの折紙をりがみだつて、最もう些ちつと年とし紀きを取とつて功こうを積つんで來くると、極ごく意い皆かい傳でん奧許おくゆるしと相成あいなります。へ、

「おや／＼然うすると。」

「喧嘩をしませんとさ。」

「何、」

「、極意皆傳奥許といふのは喧嘩をしない事です

とさ、何のこつた詰らない。」

と愛吉は何か詰らなさう。

「ほんとうに詰らない、」

「否、處が私にやあ不可ません、お嬢さんなんざ

何でも分つて居なさるんだから、はじめから幾らも皆傳になられます、荒つばい氣をお出しなすつちやあ不可ませんぜ。」

「あゝ、だからお前も喧嘩の話はおよし、お前の

話といふと屹と喧嘩の事だよ。」

と淡泊したことを謂ひながら、物足りなさうな、

濟まぬらしい、愛吉の様子を眺めて、もの優しく、

「おもしろい話をお聞かせな、私も淋いからゆつくりおし。而して、煙草がなくば上げようか。」

四十七

愛吉は店の箱火鉢を引張り寄せ、叩き曲げた眞鍮の煙管を構へ、膝頭で、油紙の破れた煙草入の中を搔廻しながら少し傾き、

「ト、おもしろい談？ 鯰が許の彼のお米が身の上へ  
ありや確もう御存じでございました

ね。」

「あゝ、二三度聞いたよ、可哀相だわ、おもしろくはないよ。」

「さてと、困つたな、喧嘩が禁制となつて酔拂ひがお氣に入らずとあつては、前座種切れだ。」

と吸ひつけ、

「お待ちなさい、お米が身の上は可哀相と極つて、長崎から強飯が長い話と極つた處で、これがおもしろいと形のついた話といつてはありますまい。私が一度甲州街道の府中に行つて居たことがあります。

よくはやりましたが、新店で、親方といふのが少いので、女房も未だ出来たてだもんですから、職人は欲しい、世話はしたいが一所に居るのは些と工合

が悪い、内には妹と厄介な叔母とが居て、丁ど別に  
一軒借りようといふ處で、家は見つかつて居る、所  
帯道具なんぞ、一式調ひ次 第あとから  
繰込むとするから、私に先へ行つて夜だけ泊つて  
居てくれると恚ういふ話です。

宜しうございますとも。早速其晩から煎餅蒲團一  
枚宛抱へて寝に行きました。木戸があつて玄關まで  
あつて間数が七ツばかり、十疊敷の座敷には袋 棚、  
床の間つき、時代にたら／＼艶が着いて戸棚の戸な  
んぞは、金箔を置いて白鷺が描いてあらうといふ大  
したもんです。

私は日附の家へ瀬踏に使はれたんだとは氣が着き  
ませんや。

床屋風情にやあ過ぎたものを借りやあがつた、襖  
の引手一個引剥しても、一廉飲代が出来ると思  
つて、薄ら寒い時分です、深川のお邸があんなにな  
りました、同一年の秋なんです。

其十疊敷の眞中で、昆布巻を極めて手足をのび／  
＼と遣りましたつけ。

愛吉は吸殻を拂いて、

「可うござすかい、さあ寐られませんか。総鎮守の風の音が聞えますね、玉川の流は響きますね、遠くぢやあ、ばつたん／＼機織の夜延でせう、淋いつたらありません。」

悪くするとこりや狐でも鳴きさうだ、弱りましたね、然やう、一時頃でございましたらうか。」

聞惚れて居たお夏は急にあどけないことをいつた。

「出たかい。」

餘り唐突に聞かれたから、愛吉まごついて、

「へい、何でございます。」

「いづれ何か。」

「最初は、庭に手水鉢があります、其の雨戸がカタリといひましたつけ、縁側を誰か歩行いて來ます、變だと思つてる内に、廣間の前の處で聲音が留んだんです。へい、」といつて一ツ自分で頷いた。

「それだけ。」

「何ういたしまして、これからなんですか。しばらくすると、すつと障子を開けましたが、私が枕を持ち上げる時には、最う畳を三畳ばかりすら／＼と歩いて来ました。

見ると婦人。

はてな、盗られる物はなし、戸じまりはして置かないから、店から用があつて来たのか不知と、ひよいと見ると、何う仕り  
床屋の妹といふのは一寸娘柄は佳うございましたけれど、左の頬邊に痣があつて

第一圓顔なんで。」

四十八

「よく演劇えんげきで為すたり、畫ゑに描かいたりするのは腰こしから下したが霧きりのやうになつてませう。

私が爾時わつし見みましたのは、何どうして、大たいした結構けつこうなものですぜ。

目鼻立めはなだちのはつきりとした、面長おもながで、整然ちやんとした高たか島田しまだ、品しなは知りませんが、よろけた豎縞たてじまの薄うすいお納なん戸どの着物きもので、悄乎しよんほりまくらもと枕許まくらもとへ立たつたんです。

時刻じこくは時刻じこくだし、場所ばしよは場所ばしよですし、  
だ い

第一だいいち、其その玉たまが又また、府中ふちゆうあたりに見みようたつて見みられるのぢやありません。何なにしろお嬢様ぢやうさま、三階建がいだての青樓あぢやうの女郎ぢやらうが襟えりのかゝつた双子ふたごの半纏はんてんか何なにかで店みせを張はらうといふ處ところですもの。

歌舞伎座こびきちやうのすつばんから迫上りせりあがさうな美うつくしいんだから、驚おどろきましたの何なんのつて、ワツともきやつともまさかに聲こゑを上げはしません、一番生命ばんいのちがけで、むつくり起上おきあがると、フイと背後向うしろむきになつて、風かぜを切きるやうにすつと引返ひきかへしました。爾時そのときは背筋せすじのあたり、

眞白な襟を艶々した鬚ね、毛筋もならべたほどに見  
えましたつけ、最う消えたんです。あくる朝は茫乎  
で何うも考へて見ると夢のやう、早い處で先づ、其  
の消えたあとのことを思出すと、何しろ眞暗なんで  
ございませう。夢でなくツて顔色が何うの、着もの、  
色が何うの、鬚の形が恚うのと、分るわけがなから  
うぢやありませんか。

夢とすると話が出来ない、いかに田舎稼に出て居  
たつて、野郎の癖に新造の夢でもありますまい。之  
が山賊に出逢つて一貫投げ出したとでもいふ事なら、  
意氣地がねえたつて茶話にやなります。

黙つて居ました。

其の晩、又昨夜のやうに、燧火だけは枕頭へ置い  
て火の用心に灯は消して寐たんですが。

同一刻になりますと、雨戸がカタリ、ほんの、カ  
タリと聞えます文なんで、縁側に登音がしませう。

枕を上げて見たばかりで、何故だか起返る事が出来  
ません。

其の女もしばらく立つて居ましたつけ、別に何と  
いふ事は無しに、縁側の障子の際で、肩の邊が消え

ますとね、棧が見えて高島田もなくなりました。」

お夏は半ば聞棄てゝ、氣を入れるともなく返事はかりして、帳面を彼方此方ばら／＼と返して居たが、此時一點も疑ふ色のない顔を上げた。

「奇代だわねえ。」

「えゝ、まだ／＼其が三晩四晩と續きましたね、段々氣味が悪くなつて來る所為ですか、さあ、おいでなすつたと想ふと天窗から慄然として、壓を置かれるやうな鹽梅で動くこともありません。」

五日經つてからお約束の、叔母と、妹といふのが引移りました。けれども、そら私に瀨踏をさした位なんですから、然うやつて日が經つても、何にもいはないについて大丈夫とは思つたでせうが、未だ安心がなりません、其處で段取は抜、所帯道具は運ばないで先づ泊りに來たもんです。

次の間の六疊に二人抱ツこをして寐ましたつけよ。お前さん昨夜は大層うなされてねと、夜が明けてから吐しまさ。さあ愈々だ、ときよつとしたけれど、

何時頃にと、惚けて尋ねますと、丁ど刻限が合つて  
るんで。

まゝよ、恚うなりや百年目だ。新造に取着かれる  
覺はないから、別に殺さうといふのぢやあなからう、  
生命に別條がないと極りや、大威張りの江戸兒、

「 吻々々々、」

「 眞個に度胸を据ゑました、否、大したことぢや  
ありません。何か化けて出る因縁があるに相違ない  
と思ひましたからね、思ひ切つて聞いて試ようと、  
さあ、事が極ると日の暮れるのが待遠いやう。」

四十九

「婦人二人は、又日が暮れると泊りに來ました、いゝ工合に青緡を少々握りましたもんですから、宵の内に二合半呻りつけて、寢床に潜り込んで待つてると、案の定、刻限も違へず、雨戸カタリ。

ちらりと姿が見えたが勝負で、私あ目を瞑つて、江戸兒だ、お前さん何の用だ、と言ひました。

すると莞爾笑つたから凄うございませ。少し俯向いて恚う胸の處に袖を重ねて居た、其をね、兩方へ開いたでせう。

突然、大蛇の天頭でも顯れるかと思ふと、然うぢやアありません。之を預けたさに、と小さな聲で謂ひましたね。青い襦袢の中から、細い手を差延べたから、何か知らんが大變だ、幽霊の押着ものなんざ恐しい、突退けようと向うへ突出した此の手ツ首の細い處へ、」

愛吉は指の環で左の手首を握りながら、

「一本きら／＼する銀の簪、脚を割つて突さすやうに挟んだんです。確かに、可うござんすか。確かに、といふ口の下、ぐい／＼と其の簪の脚が緊りましてね、此處が不思議ですよ、其の痛いことゝ謂つたら、思はずキヤツといふと、愛吉さん／＼と呼びますわ、次の室で二人の聲がするから、氣が付きますと、私は床の上へ坐り直つて、現にもお嬢さん、恚うやつて左の手ツ首を壓へて居たんです。

恐しいことには、夜があけても何だか脈處が冷たいやうで、ずき／＼痛みましたから堪りません。

打明けては言ひませんでしたけれども、二晩續けて私が壓されたのを聞いたんで、婦人二人は最う厭だとかぶりを振ります。

有耶無耶の内は、夢だらう位で私も我慢をしましたけれども、然う何うも手首へ極印を打たれちゃあ辛抱がなりません。迎も次の晩からは其の家へは寝られませんが、形なしになりましたが、私あはじめでゞす、いまだに不思議に思ひますがね。」

「其ツ切逢はなかつたの。」 「え、最う木賃の方へ逃げました。」

「惜しいことをしたねえ、何かお前に頼みごとでもあつたんぢやあないか、其でなくつても又來た時を待つて居て、分を聞けば可かつたのにね。」

と身に染みて、お夏は殘惜しさうな風情であつた。

「今で見ますと、私も惜いことをしたと思ひます、ですがお嬢さん、其の場に臨んで御覽なさい、其の氣味の悪いことゝいつちやあ、口で謂ふやうなものではないんですから。」

お夏は之を聞取らなかつたほど、何か考へて居たが、

「幾歳、」

「十八九で、」

「一昨年のことだつて、」

「一昨年でございますよ。」

「一昨年十八九、私と同年ぐらゐだねえ？」

「飛んだことを、譬になすつちやあ不可ません。」

と驚いて言ふ。

お夏は自若として、

「而して簪を預けたいといったつて、十八九で綺麗な女で、可愛らしいお化だこと。眞個に可愛いぢやないかねえ、」

とものおもひ、もの思ふ様子で謂ひながら、つむりへ手を遣ると、さして居た銀脚の簪を抜いて取つた。

「愛吉、一寸お見せな、手を。」

「へい、」

「こんな風に預けたの。」

と、其まゝ手首へはさんだが、能くは入らないから耳の處へ力を入れた、銀は柔かく二ツに分れて、愛吉の手は帳場格子の上に結びつけられたやうになつたが、雙方無言で、やがて愛吉はぶる／＼と震へた。

「取つてお置き、其をお前に上げませう。」と

お夏は事もなげに打微笑み、

「其であのお化の念が届くんだわ。」

とあつけに取られた愛吉の顔を然も嬉しさうに眺めたが、不意に色をかへて、お夏は一寸簪を抜いた髪に、手を觸れて見て屹とした。此時の容貌は、過般深川の橋の上で、女中に取巻かれて火を避けたのを愛吉が見た其の如く、殆ど侵すべからざる、威厳のあるものであつた。然もあきらかに一片の懸念の俤は、美しい眉宇の間にあらはれたのである。お夏は神に誓つて、戯にも恚る舉動をすべき身ではないのであつた。

然るに愛吉が状も又た極めて案外。

其の手も引かず渠は色を正して、稍開き直つたといふ體で、

「お嬢様、それぢやあ之をお記念に頂きませう。」

「え。」

「お嬢さん、私は何とも申し上げやうはございません。」と片手を其へ、頭をさげたが、聲の調子も變つて居る。

「私もお嬢さん、あなたに取つちやあ敵でございます。へい、飛でもない、謂はゞ其の獅子身中の蟲と謂ふんで、こんな分らずやで何にも存じませんもんですから、愛吉々々とおつしやつて下さるのを、可い事にして、癩癩は引請けましたなんぞと、汝が勝手な熱を吹いちやあ、一寸々々お出入をするもんですから、こんな役雜ものと口をお利きなさりますばツかりで、お嬢様、あなたに人が後指を指すんです。知らない内はから暢氣で、一向濟したものでありましたが、人から氣をつけられて身體を持つて行き處のないほど、驚いたんでございますよ。」

まあ何の位、此方様に害をなすか、こん畜生、數が知れねえんで、へい。實に相濟みません、何てつておわびのいたしやうもないのでございます。

今晚も實は一言申上げて、お暇乞をしませうと、其事で上りましたが、いつに變らず愛吉々々とおつ

しやるので、つい言い出しかねて居りました。

唐突にこんな事を藪から棒、氣が違つたかとお思ひなさいませうが、お嬢さん。あなたも何にも御存じなし、私も些とも知らないで居ります内に、あなたの御縁談が一ツ打破れたんでございまして。

之が並一通のことぢやありませんや。對手が又た其の邊に對手欲しやでうるついでる出來星の吝な野郎ぢやアありません、汝が身體さへ打棄つてる私ですもの、大臣だつて、大將だつて、大金持だつて何だつて、絲瓜とも思はねえのに、之ばかりは大の鼻屑で、心底から惚れて居ます山の井の若先生。」

「愛吉！」

「お待ちなさい、其だ、分つてます。京橋から築地、此の日本橋、神田、下谷、一度見た親は恚ういふ人をお思はねえものはありますまい。今度あなたの代りに極りました縁の先方の、山河内の奥方でえ、彼の癖の大年増なんざ、斷食をしないばかりに、女を押つけようといつて騒いだと申すんで。」

其の若先生が、お嬢さん、あなたを望みで、影日向心を入れて居たといふのに、何と私が着絡つてるばかりに、控へたといふぢやありませんか。」

「愛吉！」

「濟みません、分つてます、分つてます。然も恁ういふ事をはじめて聞きましたのが、先達てお嬢さんが口惜がつておいでなすつた、根岸の鴨川一件だ。鼻元思案のお前ばしりに私が暴れ込んで、ひツくりかへつて可い心持で飲みました晩ですぜ、其と分つてからはお顔を見るにも御不便で、上りかねましたから、こんなに御不沙汰にもなりましたが、最一度問直さうと、山の井先生が其時は、自分で鴨川の許へ行つたツていふんです。其が頼まれもせずいひつけもなさない、お嬢さんの名を出して、私が暴れて歸つたあとだつた、といふぢやありませんか。」

口惜いのは、お嬢さんに團扇で煽がせた時がと言ふと、彼の鴨川めが肝入で、山河内の娘に見合をさせるのに、先生を呼んだ日だと謂ひますわ。敵だも

の、おまけに、私が歸つたあとで、あなたの相談が  
何うなります。其上、まだ、そんな事ぢやあない、  
といひますのは彼の若先生は、お嬢さん、あなたが  
誰にもおつしやらないで、心で思つていらつしやる、

「愛吉！」

「否、分つてます。誰も知りませんが、之を、い  
つて聞かしたのは、竹永丹平といふ、新聞社の探訪  
員。」

【完】